

アシアなりとの原則によりて、日本自ら處分すべしと云へりと云ふ。此恐るべき國に對し、ドイツが採るべき精細の方針に就きては、目今商議中にある獨日新條約の成行を見て然る後、之を決するを順序とすと雖、東アシアの商賈及び工藝家に關しては、こゝに大に本國政府の注意を乞ふべき點あり。そは即ち彼等の共同の利益の爲めには相共に擁護せんこと是なり。此趣意をさへ行ふことを得ば、希くは極東にある者が現條約の下に蒙るべき損失を保護するを得べく、國民的の憎惡はこれによりて廢棄せられ、其不利益は漸次消失し、外交政略は、これよりして益、ヨーロッパの利となること多かるべし。ヨーロッパの聯合は必ず他の攻撃する所となるべきも、之を防ぐは、又實にヨーロッパの連衡を主張するものなり。果せるかな、彼の

これ實に極東に對するヨーロッパの連衡を主張するものなり。果せるかな、彼の此論あるや否や、幾ばくもなくして三國の干渉あり。吾人顧みて無量の感慨なき能はざるなり。

四五、マクシモーフの日露同盟論

ロシアにて有名の論客ア・マクシモーフ氏の著書「太平洋に於ける吾人の問題」なるものあり。これロシア及び支那、ロシア及び日本、ロシア及び朝鮮、並に絶東に於けるロシア及びイギリスの四編より成る。堂々たる東邦策にして、此論の公にせられたるは、一八九四年(明治二十七年)の末、即ち日清戦争の正に關するの秋にあり。主としてイギリスの野心に對し、日本と結びて東洋に於けるロシアの地歩を固めんと欲するものなり。我國に於ては、幕政時代、國民の恐露熱最も熾盛なりし時に當り、俊傑少年橋本左内の獨り、日露同盟論を主張し、聊か時人の意表に出でたるものありしに過ぎず。マクシモーフ氏の同盟論は、日清戦争に於て日本の實力が多少、世に知られたる後なりと雖、ヨーロッパ、アメリカの人士は、未だ日本を目するに半蠻國民を以てするの時に當り、ロシアの利害關係よりして早くも日本と結ぶの得策なるを洞見したりしは、確に具眼の士なりと云ふべし。若し當時論者の意見にして行はれしならんか、ロシアは日露戦争の損失と汚名とを免れ得たりしなるべし。左に譯載するは、ロシア及び日本に關するの一編なり。

絶東に於て政治上極めて緊要なる地位を占むるもの之を日本帝國となす。此國實に三千萬の勇武なる民衆を有し、國力强盛にして清韓兩國并に我極東地方に治亂の影響を與ふること尠からず。この島嶼帝國の古來、東洋の霸權を專占せんと欲するは顯然たる事實にして、獨り列島の南北に漸次領土を擴張せんとするに甘んぜず、更に進んで、近隣の大陸に土壤を獲んとせり。特に日本群島と一葦の海峡を隔つる朝鮮に垂涎するや一朝一夕の事にあらず。第三、第十五、及び第十六世紀に當り、日本遠征軍のアジア伊太利(朝鮮)に大功を奏せしは、日本人の今に能く記憶せるところにして、此勇壯なる遠征、紀念物、即ち兵器等の戦利品は、現になほ神社佛閣に收藏せられ、其戦況を稗史野乘に精述せるのみならず、歴世之を口碑に詳傳し、近年に至るまで常に韓土を目して、神功皇后攻略の附庸國と倣せり。アジア伊太利は、一時支那及び我ロシアの大に注目する所となり、殊にイギリスの如きは、我ロシアの東洋に於ける政治上の勢力の發達を防遏せんが爲め、我領土に疆を接せんとし、朝鮮に向つて將に爲すところあらんとせり。而して東洋問題の主眼たる朝鮮の形勢如何を見るに、殺氣常に磅礴として、妖雲時に之を覆ひ、

列強之を環視し、争うて一の寶珠を先取せんとするの狀態なり。是を以て、各國、又容易に斷然たる行動に出づるを得ず。唯、拱手して時機の到るを待つものゝ如し。然りと雖、早晚朝鮮の運命を決すべき争端の起るべきは、蓋し自然の數なり。其運命の何れに歸すべきかは、乞ふ之を次編に論せん。

此重大なる時機は、息を收めて之を待ち、同時に日本帝國と親密の關係を堅うし、此東洋ブリタニアの甘諾すべき地點を占め、彼我同盟して以て東洋に於ける相互の利益を蹂躪せんとする清英兩國に當るべき聯合軍を組織せざる可からず。日露の同盟は、單に吾人の希望たるのみならず、實に大なる必要ありて存す。吾人は一度太平洋沿岸に於て、共に其基礎を鞏固にし、清英二國をして吾人に對し、常に服從的の尊敬と好意とを表彰せしめんと欲するものなり。日露の同盟たる、特に日本政府のみならず、殆ど總ての印刷物并に有識なる日本社會は、之を是認し、其價值を知悉せり。日露相互の政略上、共に承諾するを得べき地點の如きは、刻下、争端の源泉たる寶珠、即ち朝鮮を除くも、他に之を索むると、必ずしも難きにあらず。然れども、今其地點の何處にあるかを説明するに先ち、茲に日露間交際の沿革

に就き、其梗概を掲ぐるの要あり。是蓋し兩國の政策を攻究し、從來、我ロシア政府代表者が失體過誤の多きに拘らず、日本國民の我國に對して從來與へたる、又現在ある所の同情如何を察するに頗る便なるを以てなり。日本國民多年の同情好意は、實に相互同盟の好材料にして、又政治上日本政府との間に往々起るべき不和を融解するに極めて微妙なるものなり。日本政府との不和は、我より特に起すべきものにあらず、多年、イギリスは、世界到る所に於てロシアの政策を妨碍せんとするの邪念を有するを以て、終始、陰に奸計を運らし、百方、日本政府に詭言して、日本とロシアとの關係を離隔し、互に反目不和を醸さしめんと腐心しつゝあり。日本人に對する吾人從來の行動は、果して常に正規を守り、公明の措置に出でしやは、吾人の大に疑問とする所なり。年々、歳々、有司を變じ、政略を更め、其間往々慨歎すべきもの無きにあらず。第十七世紀の末、千島列島に初めて日本人と相見えしが、當時は何等の交渉を爲さずして、双方相別れたり。ペテロ大帝の朝、日本人に關して深く考ふる所あり。ペテルブルグに日本語學校を創設するに至りしと雖、此一時の日本熱は、忽ちにして、冷却し、第十八世紀に至りては、吾人は此國民と一

の著しき衝突もなく、否、多少の關係だに有せざるに至れり。

日露の關係に於て、眞面目なる第一回の交渉は、實に第十九世紀の初めに於て起りたり。此交渉たる、惜むらくは、單に不和失態の因縁となり了れり。日露間、通商條約締結の爲め一八〇四年、日本に派遣されし有名なるレザーノフ氏は、嘗に本條約締結の功を奏する能はざりしのみならず、其失態より更に惡意を生じ、平和の政策は、轉じて殺伐となり、頻に黒龍江の占領を説き、此占領を容易ならしめんが爲め、第一着としてサガレン島の攻略を政府に勸告せり。當時、該島の南部は、日本人既に商館を建て、工業場を起し、産業の基礎、大に見るべきものありしなり。レザーノフ氏は、稟請に依り、派遣せられたる海軍將校フヴーストーフ及びタウキドフの兩氏は、サガレン島並に千島列島に在住せる日本人を窮迫せしを以て、其終りを全ふする能はず、遂にディアナ號艦長海軍少佐ゴロニン氏の如きは、日本人の捕ふる所となれり。

此不穩の狀況は、忽ちにして恢復せり。ロシア政府は、海軍大尉フヴーストーフ氏のサガレン島占領は、事擅横に屬するものと認め、公式上、該島の占領を放棄せり。其

後、ムラヴ[#]ヨーフ將軍のシベリア管轄廳に長官となるに至る迄、東方平穩にして日本人との關係は圓滑なりしと雖、同氏の來るに及びて死灰再燃し、レザ[#]ノフ氏の企圖を實行せんと欲せり。一八四九年より五三年に至るまで、黒龍江口を精測し、サガレン島の各地には、軍事上、必要の建設をなすと共に、形勝の地點は多く之を占領し、西北に在りてはドウ[#]エを、南部に在りては日本領のアニ[#]ツを横奪せり。是に至りて再び日本人と相見しと雖、此時は既に善隣の友にあらずして互に兵器を携へたるの仇敵なりしなり。

翌年、政府はムラヴ[#]ヨーフ氏を罷め、海軍將官ブ[#]チャーチン氏を以て之に代らしむ。同氏は直に平和主義を回復し、日本領のアニ[#]ツは、前官の建てたる國標を撤して之を還附し、特命ある場合の外、日本領土を侵すことを禁せり。即ち此平和克復の證左として、其適例を示さんに、當時、東洋に於て沈没せる我軍艦ディア[#]ナ號の乗組員漂泊して日本領に上陸し、將に餓死するの已むを得ざる時に當り、日本政府並に此地方の日本人は、極めて厚く乗組員を款待し、些かの遺憾なき迄に便宜を與へたり。

一八五五年、初めて日本と下田條約を締結し、此時、千島列島の境界を定め、サガレン島は別に國界を設けずして兩國共同に管領することとなれり。一八五八年に至るまでは一の衝突なく、互に相親み、國交大に圓滑なりき。此年ロシアの軍艦アスコ[#]リド號暴風の爲めに難破するや、日本政府及び其國民は之を救助し、此くの如くにして、日本の締盟國中、獨りロシアは特別なる利益を享受し、愈、彼の信用を厚うしたり。蓋し他の締盟諸國は、何れも皆日本と事あるや、彼等の慣手段たる砲煙劍戟に之が決答を得んと擬し、常に脅迫を以て唯一の政略とせしも、此際、獨りロシアのみは穩和を守り、日本の甘心を失はざりしなり。

日本人は能く己れを知るものを知り、支那人等とは全く反對の稟性を有す。固く國民の品位を守り、外交の如きは、適當の敬禮を持し、我ロシアの寛仁なる政略を了解したりしに反し、歐米強國は初めより過つて之を支那人と同一視し、常に支那人に向ひて用ひたる強迫手段を以て日本人に適用せしが故に、彼等の感情を害したるもの尠からず。爾來年所を経るの後、日露關係、稍、異狀を呈し、日本は歐米諸國の強請に迫られ、ロシアに對して衷情忍び難きものあるも、將、自國の國威を

損することあるも、勢ひ節を折りて列國の強請に従ふの已むを得ざるに至れり。然れども、常にかゝる運動の牛耳を握りしイギリスの利己主義は、日本人の風に看破せしところなりき。

一八五九年、日露の關係は、格段の變化を生じ、日本政府の組織、亦變更せり。日本政府の改進黨(開國黨を指す)は、其席を保守黨(攘夷黨を指す)に譲り、ロシアにありては、海軍將官ブーチャー・チン伯に代らしむるに、ムラヴ・ヨーフ・アムールスキ氏を以てせり。是に於て乎、再びサガレン島問題を喚起し、我よりは、該島の全領を目的とし、且つ、其讓與は無條件を以て要請せり。當時日本人は、古來、曾て無き江戸灣の封鎖砲撃を豫想せる弱點ありしに乘じ、我使節の一行は、國産を齎し禮を飾り、故らに此海灣に近迫して談判の進行を圖りしが、此交渉、空しく月餘に及びて終に我希望を満足せしむるに至らざりき。是、イギリス公使が竊に日本人に告ぐるに、ロシア軍艦の江戸灣封鎖の如きは、一の威嚇手段にして、全く空言に過ぎざるべきを以てしたるに依りしなり。

斯くイギリス使節の詭言は、日露親交の連鎖を破り、一時、全く絶縁の逆遇に陥り、

ロシア士官及び水兵は、日本の不平諸侯の部下に屬する刺客の毒刃に斃れ、外人放逐の思想よりして殺害諸方に行はれ、危險益、加はれり。此くの如き不幸なる運命は、我政府千鈞の耐忍力に依りて漸次、恢復することを得、各國は、日本人より加害せられたる自國臣民の遺族救済に託し、少なからざる償金を要求せりと雖、ロシアは、特り之が擧に倣はず、單に日本政府の謝罪に甘んじ、以て其寬仁を表せり。これ我外交官の良策に因ると雖、外交官自身が故意に斯かる所置に出でたるにあらずして、只我政府在來の平和主義により、偶然の好果を收めしに過ぎざるなり。是より一八六〇年までは、物議多きサガレン島問題を放棄し、一意、和親を旨として互に交際を厚くし、ロシアは、函館に日本少年子弟の爲めに學校を建設し、日本海軍練習の爲め我海軍士官を派遣し、常時、有力なる艦隊を日本の海港に碇泊せしむる等、力めて我和親の衷情を彰明したり。

斯かる間に、日本の開港場は、須臾にして全世界の商船輻輳し、利益多き外國貿易は、豊富なる群島の各港に勃興せりと雖、不幸にも、我ロシアの商船旗は、此時未だ片影だも日本の沿海に翻へらざりしを以て、交際に慣れざる彼は、疑懼の念を起

し、ロシアの商船は何れの時か、日本に來航すべきと質問を發せり。由つてロシアは其親交を求むるもの、決して他意あるにあらず、又我國は未だ海商國の高位を占むるに至らず、商業上、尙爲すなきの國なりと自白したるも、此等の辨明は、何等の效果なく、唯一の甘言の如くに聽了せられたるに過ぎず。日本人は既にイギリス、オランダ、フランスの諸國より適當の教師を聘用し、是より聞知すると尠からず。而して彼等外人の教師は、日本人に告ぐるに只管ロシアを誣謗するの言を以てせり。例へば我等列國の如く、ロシアが日本に通商上の恩惠を與へざるは、獨り自國の商船を有せざるが爲めのみならず、或は他に含む所あるを以てなり。此等の讒誣は、非常に日本人の疑心を惹起し、ロシアを以て必ず政略上、二心を抱くものと斷定せり。是を以て日本人以爲らく何故ロシアは我沿海に斯る優勢の艦隊を碇泊せしむる歟、何故我國との交際を努むる歟、何故二回の通商條約を締結せし歟、日本の此疑問を發すること益、頻なりき。抑もロシアが日本海面に優勢の艦隊を浮べ、又ロシア人が日本人を待遇する厚きは、日本に對する敬意の現象に外ならずと雖、彼等はイギリス人の爲めに疾く猜疑心を養成せられたるを以て、

容易に我本意を窺ふこと能はず、却てロシアが他に陰險多慾なる目的を有するものと爲し、ロシア人を視る、恰も一仇敵の如くなるに至れり。

此くの如き惡感情を醸成せし時に際し、當時、偶成の一事件により一段の敵愾心を鞏固ならしめたることあり。そは即ち此頃ロシア人は、容易に對馬島に下手す可らざるの時にあたり、突如として前年來の暴略主義を再演せしこと是なり。我某艦長は、專斷にも該島を占領し、自己の意思により、僞りてロシア政府の籌略なりと稱へ、益、彼等近來の疑心を煽發し、日本の人心を沸騰せしめたり。彼等は、直にイギリスに就きて居中調停を依頼し、我に向つて抗議を試みしを以て、遂に吾人は慚愧して占領したる該島を還付せりと雖、爾來日本人のロシア人に對する感情は甚だしく不良となれり。

對馬島衝突の後、我政府は、東洋群島の内治外交共に絶縁的に一切の干渉を放棄せりと雖、我國が日本のサガレン島を我有に移さんとするの念慮は、常に其腦裡を去らざりしなり。

日本内國に於ては、當時絶世の騷亂、起りしを以て、此際我ロシアは十分、重大の要

請を爲し、加之、日本帝國に對する從來の親交に就き或説明を與へ得べきの時機なりしも、我國は遂に沈黙して、唯諸強國に勸告するに、須らく日本の内亂に乗じて更に或特權を要求し、之に依つて各自勢力を増進すべきを以てしたり。一八六三年及び六四年に至ては、其變亂は、國家の休戚に關して殆ど其極點に達せり。イギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、オランダの五國は固く聯合して日本人の破却せんとする通商條約を防護し、鹿兒島の堡壘は砲撃せられ、横濱は各國聯合艦隊を以て占領し、下の關海峽は貿易保護の爲め、砲丸を以て一掃せられ、長州侯の城壁は遠く印度及びイギリスより率ゐる來りたる軍隊の爲めに粉碎占略せられたり。而して徳川政府の締盟せる通商條約は、日本皇帝之に許を與ふるを肯せざるも、如何せん、外寇内訌、交起るを以て、遂に歐米聯合砲彈の下に之を批准せざるを得ざるに至れり、茲を以て、該帝國主權者と外人との間に横はりし頑強なる疎隔を去り、又内地に於て外人の(ロシア人を除く)殺傷せられたるものは、新政府より各國に向つて巨額の償金を拂ふこととなりたり。

ロシアは、當時、ポーランド問題の危機一髪に迫りしが爲め、遂に此出兵に加はら

ざりしも、我艦隊は既に出師準備の命令に接し、諸事を整へ、暫らく將來の電命をサンフランシスコに待ちしが、本艦隊の日本沿海に歸航せし時は、事既に全く定まり、吾人は唯諸強國の成功せし結果に甘んぜざる可からざりき。此に於て乎、日本開港の制は、吾人を其列外に置き、頗る不利なる状態にありしも、日本人は、能くロシアの勢力を認識し、却て徳義上、我國に敬意を表し、特にロシア人には、イギリス風の陰險強迫の性向なく、常に日本人との親交を希望するものと明解するに至れり。

曾て一八五五年及び五八年の條約に依り、サガレン島の日露共同管領は、依然今日に至るまで變更せざりしを以て、其間、自然に缺點を生じ、共同管領の文字は、締約の當時何等の註釋もなかりしため、該島内、日露相互の駐在有司間に分界確定の議を起し、マスウナイ河を以て之を限らんとし、遂に該河の一方にはロシア守備隊の駐營を設け、他の一方には、日本船舶の碇泊場を開くことなれり。然れども、人烟稀少なる此海岸の事なれば、兩國人數、出會し、ロシア人在住の地利は大に劣れるが爲め、日本人は自然、之を貶下し、日本の部落は徳義能く行はれ、市區整然、到

る所清潔にして秩序を紊さざるに反し、我ロシア部落は殆ど社會の外に捨てられ、本國より忘却せられたる、我守備營の如きは、前後二回まで、日本人の爲めに饑餓を救はるゝの有様なりき。豈、耻辱の甚だしきものと云はざるを得んや。其精細なる歴史の如きは、今敢て説明を要せざるべし。否、之を説明するに忍びざるなり。一八六五年、ペテルブルグに日本公使の派遣せられたるを機とし、我政府はサガレン島問題を提供し、千島列島の南部を全く日本の領土と定め、以てサガレン島の全領を我に譲ることを促せしも、本交渉は、またイギリス政府其中間に入り、同國太平洋沿海に我政治上の勢力成長するを嫌忌せるを以て、之が爲めに執拗なる妨害を受け、遂に少しの好果をも收めざりき。

一八六七年三月十八日、更に日露の條約を締結し、サガレン島に於ける日露共同の管領に説明を附することとせり。即ち、兩國人は、サガレン島の未だ何れにも占領せられざる部分は、該島何れの地を問はず、相互、同等の先取權を有するものと決定せり。これ實にサガレン島問題の決定を徒に一時遷延せしむる曖昧模糊の説明に外ならず。これ實に、將來甚大なる困難の種子を播種したるに等しと謂ふべ

きなり。

かゝる説明の爲め、日本政府は忽ち利益を得、此年、直に該島に向つて秩序正しく植民地を開設せしが、同時に彼等は、此拓植事業のロシアと親昵結托するの利益なるを、從來イギリス人の貪慾なる勸告の眞意を了解するに至れり。元來、本島の植民事業たる、ロシアの爲めには困難にして、日本の爲めには容易なるは、事實上明かなる所にして、日本との距離の遠隔ならざる、日本の國力の富裕なる、加ふるに其人口の饒多なるは、孰れも該國政府をして、此業の施行を容易ならしむるものと云ふべし。故に敢て經營に力を用ひず、又敢て物資の消費を要せずとも、早晩其成功を期すべきなり。勿論、多少の費用はあらんも、そは單に移民の生計品に止まり、此消費は、該島の産業、即ち多額なる漁業、并に獸獵の利益を以て容易に之を償ふに足らんのみ。

サガレン島植民の爲めには、日本政府は多少の費用を要すべきも、ロシアにあつては、本國の中部より國稅免除の下に移民を促し來らざるを得ず。之が爲めには、莫大なる不生産的の費用を要し、加之、軍隊の舍營を築造し、該島植民に何等の利

益を與へざる無妻の兵卒には、別に其衣食を供せざるべからず。日本人は之に反し眷族を有する労働者、又は職工の一致協同せる大部落を創設するの容易なるは、實に羨慕すべきなり。時日を経るに従ひ、吾人の漸次マスウナイ河の南岸に進入し、アニワ灣の沿岸に兵舎を再建するや、日本人は又忽ちにして該河の北岸に移り、曾てロシア領たりし空漠の地に一團の部落を開き、相争うて開拓進路に従事せり。露國は到る處に兵舎を築造するは、眞に煩に堪へざる所なるを以て、茲に兵舎の建設を止め、代ふるに記號を刻したる標木を植ゑ、以て國領の分界を定めたりしが、これ亦忽ち日本人の擬するところとなり、彼等は力の及ぶ限り、東奔西走、國標を建設せり。斯くの如き非常の競争を以て劃定せられたる國境は、犬牙錯雜を極め、遂には、ロシア地方官と日本官吏との間に間斷なき争端を惹起し、互に反目嫉視の絶えざるに至りしは自然の勢ひなり。

是に於て乎、ロシア政府の本意に戻りて、全然反對の惡結果を生じ、サガレン問題は年々複雑となり、遂に將來如何なる困難禍害を醸すやも計り難きに至れり。又一方にロシアは囚徒の移住を十分に行はんとし、石炭鑛業を開始せしため、勢ひ

日本人の雜居に苦痛を感じ、該全島を領するの必要、目前に迫り來りたるを以て、其趣旨に依り、茲に重ねて日本政府との交渉を開くに至り、歲月を閲して久しく決せざりしが、終に一八七五年八月二十五日、該政府と最後の條約を締結し、即ちサガレン島は全部、眞正なるロシア領に歸し、日本群島に近接せる千島列島は全く日本の領土と一定したり。

多年決せざりしサガレン問題は、茲に初めて終局を告げ、相互兩國の福利を侵害することなく、否、寧ろ福利を享受することを得て、更に一層の親交國となれり。我ロシアは初めより平和主義を守り、本件の難問を處置せしを以て、大に日本政府、并に其臣民の好意を博し、加之、かのイギリスが羸弱の外國に對し、砲銃劍戟を以て事を決するが如き卑劣の慣手段を採るに反し、ロシアは斷じて此くの如き事をなさざるが故に、我國の信用は彼等の間に一層堅固となるに至れり。

以上は日本とロシアが、外交史上よりして兩國時に相衝突したることあれども、其友情の流水が嘗つて兩間に斷絶せし事なきを證せんとするものなり。悉く事實にはあらずと雖、中に幾分の眞なきにあらず。マクシモフ氏は更に一

歩を進め歴史論より轉じて政治論に入れり。

東洋政略上、日露共に優勢の地歩を占めんと欲せば、須らく兩國協同和親せざる可からざるの所以は、前章に於て之を略述せしが、彼我何れの側面より觀察するも、これ必ずしも難事にあらざる可し。かの日本氣質たるや、武士的正直にして、能く善意敬禮を尊び、他の信用を保ち、常に野心なきものなり。

なほ語を重ねて日本人を短評せんに、彼等は丹心至誠を以て交際を重んじ、又勇俠なる武人氣質、信義を以て他の親邦に接せんと欲するものなり。此美質の如きは、一朝紛紜のことあるに際し、事の處辨に好便宜を與ふるものにして、最も尊重すべきものなり。故を以てかのイギリスに存する陰險にして詭言を好むが如きは、日本人の極めて輕侮するところ、彼等は容易に善惡正邪を識別せずと云ふことなし。爰を以て、吾人にして若し能く東方政策の趣旨範圍を公明にし、以て日本人に需むるあらば、かれ豈、何事か甘諾せざらむや。我ロシアの本分として日本に助勢すべきは、第一、彼が日本の島嶼領域を南部に擴張せんとするの場合、第二、我國家の利害に關係を有せざる日本の外交政略決定の場合なり。日本は又朝鮮を

以て自己の政略を及ぼすべき範圍外とし、早晚朝鮮の干渉を辭すると同時に、之をロシアの干渉に歸せしむるを欲するなるべし。蓋し日本人にして若し、朝鮮を併呑するに於ては、必ず將來に於て殆ど恢復すべからざるの困難を惹起すべきを認識せるを以てなり。且つや古來韓民は、屢、日本の侵略を蒙り、八道の山河、之が蹂躪する所となりしを以て、今に至るまでも種々なる妄想を逞うし、日本を畏懼すること甚だし。故を以て日本は容易に韓民を治御すること能はざるべく、よし他に良手段ありて久しく韓土を征服せんとも、其困難、之より大なるはあらざるべし。これ他なし、彼にして若し清國と直接國境を交ふるに至らんには、積年の讐敵心は何日かは爆然として破裂し、清民が日本人を朝鮮海峽外に驅逐すべきは、炳然、火を睹るよりも明かにして、日本の遠く海外敵地の近隣に版圖を占め、常に清國の大軍に對抗し、巍然として自立するが如きは、他國の助力なき彼が現勢の上、に於て、容易に之を望む可からざればなり。此時に當り、日本、我に救援を求めん乎、我、決して應ずる能はざるなり。何となれば、朝鮮半島の占領を他國に認容するが如きは、ロシア國、國是の固より許さざる所なればなり。故に假令、日本が清國と

最後の戦能く彼を粉碎して殘すところなきに至るとも、決して韓土を奪略す可からず。唯朝鮮をして真正の獨立國たらしむるを以て自ら慰めざるべからず。イギリスが、エジプトを略取したる實蹟と、同一の處置を試みんとするが如きは、我に於て決してこれを默視すべきにあらず。絶東半島に於ける我政治上の命脈消長は、我大平洋沿岸に於ける國運に影響を與ふること莫大なればなり。著名なる朝鮮問題に關しては、後段細説するところあらんとするを以て茲に蛇足を列ねざるべし。ロシアは日本國に向つては有益なる真正の忠言を與へんとす。即ち何れの時を論せず、日本は一日間と雖大陸の略取に空しく力を致す勿れ。須らく諸島の蠶食攻取、臺灣群島の全領を以て満足すべし。これ極めて得策なればなり。日本は實に多少優勢なる艦隊を有するものなれば、太平洋に於て顯著なる地位を占め、彼が帝國をして東洋のイギリスたる位置に立たしむるは敢て難きにあらざるべし。若しそれ本題の實行を望まん乎、日本の爲すべきところは一に信義ある強國、即ち我ロシアと聯合提携するにあるのみ。此同盟の鞏固なるに及んでや、日露兩帝國は、苟も各自生存上の福利を害せんとするものあらば、一舉聯合軍

の下に之を排却することを得べく、假令イギリス、ドイツ、支那の各國舉て奸計陰謀を用ひて、兩國の福利を害せんとすとも、豈之に讓歩するが如きことあらんや。否、吾人は却て一層の光榮を以て之を擊退すべきなり。再言すれば、日本は實に太平洋沿岸に於ける我唯一の親交同盟國にして、此親交たる、獨り我の爲めのみならず、彼亦、我に對し大に尊重すべきものなりと信ず。彼我兩國は、東洋政略上、互に利害を均うし、唇齒輔車、常に相關するところ最も多し。世間の論者、往々にして富強なる日本帝國の國力増進を稱揚し、以て故らに我ロシアを恐怖せしめんと欲す。嗚呼、又、何等の無謀無識をや。日本國運の猛進は、我國の痛痒を感せざる所にして、之が危険を恐るゝものは、蓋し却て以上の誣説を流布する輩の本國に在るならん。吾人は熱心に日本の進歩を祝賀し、深く之に敬意賛同を表するものなり。何となれば、日本は、ロシアの常に敵視せるヨーロッパ人に受けたる苛酷にして耻辱なる桎梏を脱却し、漸次、獨立不羈の強國となり、吾人の爲めに極めて有害なる或る一種の壓力を排除し得ればなり。ロシアは、日本と直接結托するの時に於て、獨り能く萬國通商の燒點たる支那海に向つて、我勇猛な

る前衛軍を進め、以て久しく我と對陣せる強威なるイギリス植民地の疆界に迫るを得べきなり。

或新聞記者は、曾て日露同盟を批難して止まず、前年、琉球問題に就き、日清葛藤を生じたるごきの如きは、頻に清國に同情を表し、ロシアをして清國に對し、道義上の保護を與へしめんとしたりき。これ實に採るに足らざる僻見にして、固より一笑にも値せずと雖、試に之が所論を摘記せん。曰く、清國は保守的なり、故にロシアの爲めに危険にあらず。然るに日本は急進的にして、備ふるに甲鐵艦隊とヨーロッパ風の軍隊とを有せり。此帝國の強盛は、將來、我絶東地方に害毒を與ふるなきを保せず。又ロシアは現在並に將來とも清國に對する通商交易の利、莫大なるに反し、日本との貿易は殆ど皆無なり。故に利害の權衡上、勢ひ清國の利益に傾かざるを得ず云々。なほ進んで其續論を見るに曰く、日清葛藤の際は、ロシアは曖昧なる局外中立と保護とを清國に與へたるを以て、其報酬として清國より松花江の一帯、伊犁の沼澤、イルツイシユの上部、エニセイ河の上流地方の贈與を受くべきものなり。此等の土地の如きは、當時清國の同盟辯護者の説に依れば、老大帝國に取

りては、實に建築物の一小破片に過ぎざるを以て之を要請するも敢て失當にあらざるべしと。

此くの如きの言論たる、一も據るべき證券なく、徒に孟浪の浮説を弄したるに過ぎず。これ大に二百年來、露清兩國の政治歴史に反するものたり。露清の關係たる、從來の實驗に徴するに、最初よりして圓滿なる能はず。清國を終始、誦詐奸計、交相繼ぎ、巧みに口實を設けて事を左右にし、常に自國の責務を朦晦にし、爲めに清國との通商貿易は、現今に至るまで、絶えず妨害を受け、イギリス、アメリカ、フランスの各國に於けるが如く、之を行はんとするも、更に何等の効なく、又清國官吏の貪婪なる、法規を曲げて我商人より賄賂を強收せんと努め、時に彼が權利上、苟くも優れるものあるときは、忽ち我の弱點に乗じて過重の要請を爲すと、恰も古代強盛なる諸侯の其配下を遇するに異ならず。

茲に讀者諸君と共に、曾て武力を以て打破せられたるネルチンスク條約、及び此條約の繼續せし百五十年間の事態を追想せんに、當時、彼は、我公使に不敬を加へ、其他諸事、我に對し甚だしき暴狀を極めたり。之によつて見るに、清國にして一朝

自家の強大を感ずるに於ては、傲慢暴狀、他邦を遇するに、寸毫も假すところなかるべきは豫想するに餘りあり。其實勢は、目下歐米人の大に判斷に苦むところにして、彼は又、近來に至りて稍、自力を悟れる者の如く、近くは我國に割讓せるクリツヂア地方の返還を要請せしが如き、其言動、名狀す可からざるの不遜ありしと雖、吾人は舊來の平和主義を固守して、干戈を動かすの不幸を忍びたり。

清國の我に對する宣戰準備は、世間の同情に依つて大に其根據を固うせり。斯かる邦國に對しては、我、豈信義を以て交はることを得んや。吾人は清國に對して平和政策の持續すべき間は、我より事を起すの愚を爲さず、能く自ら守ることを力むるものなり。これ、蓋し我政府の執るべき方針にして、清國の意向に雷同するが如きは、却て大に我國威を損ずるものと言はざる可らず。清國に一朝、事ある時、即ち日清交戰の如き場合に在ては、ロシアは清國に道義上の保護を表せざる可からざる歟。否、決して此くの如き理あるなく、斯かる場合に於ては、却て我に親交ある日本に力を致すべし。日本の如きは吾人の利害を利害とし、終始、我と相提携するを望むものなり。賢明なる政治家の爲す所は、常に己れと舊交あるものゝ爲め

に力を致し、或は己れに特別の利あるものゝ爲めに之を助くるにあり。此理、決して忘るべからず。清國にありては、我に舊交あるにあらず、又一利あるにあらず。清國との親交なきは舊來の實例に徴して極めて明瞭なるものにして、將來とても、彼との親交は又殆ど期す可からず。我は無上の信義と武士的正直を以て接せしに拘らず、彼の我を詐欺侮辱せしこと、嘗に一再のみならざるなり。これ吾人の忘れんとして忘るゝ能はざるところなり。

日本は現在に至るまで、我國に對し、純正平和の政策を一貫し、假令、我極東地方に派遣したる官吏、近視眼にして、數、彼と衝突し、不穩の行爲ありしと雖、敢て深く之を咎むることなく、單に官吏其人を得ざるが爲めとしてこれを寛恕せり。實に我ロシア政府は、其東洋政略の初歩に於て、我政府の代表者の、大に日本を窘迫せることあるも、日本は之に酬ゆるに何等の要請をも以てせざりき。その寛大宏量なる實に此くの如く、右等の失錯あるにも拘らず、専ら舊盟を訂し、衝突の諸因を排却せんことを望みて止まざりき。嘗つて日本沿海に遭難せし我幾百の海員に對し、之に衣食を給し、款待せしは、かの日本にあらざるか。サガレン島の軍營、一時、本

國に忘却せられ、糧餉蕩盡の際其饑餓の困厄を救濟せしはかの日本にあらず乎他の強國中特にロシアを撰んで交易の款を通じ、以てその和親を厚うせんとするは亦かの日本にあらざるなき乎。

日本は我に對し非常の友情を保持せり。曾て日本帝國內、到る處に攘夷黨跋扈し、日本耶蘇教徒の之が爲めに斃れたるもの其幾千なるを知らずと雖、我ギリシア教信者は、此等の毒手に罹る者なく、一、二、過つて獄に投せられたるものありと雖、日本政府は、外交官の忠告を容れて、直に之を赦免したり。

上來の次第を按ずれば、日清兩國何れを撰んで、我友邦とすべき歟の問題に就きては、敢て考慮を要せざるなり。吾人同胞の同情は、早晚、太平洋面に於ける政治上の大機軸を掌握すべき、強盛なる島嶼帝國に集注すべし、否、集注しつゝあるなり。日本は、能く我同胞の熱心なる衷情を諒すべく、こは該國民の武士的正直なる性質の固く保證するところなり。

近來、往々、蒙古人種合體論を説くものありと雖、以て吾人を驚かすに足らず。該論の如きは實に一笑を値ひせず。蓋し日本及び支那兩國の間には、測度すべから

ざるの深淵あり、即ち、古來幾千歳の仇敵心、相互の間に横はり、兩國の何れに、如何なる英邁明智の政治家ありとも、此宿怨を一洗すると能はざるべし。貪慾、飽くを知らざる利己主義の政略によつて、東洋の天地に風波の生せんを熱望せるヨーロッパ列強の大政治家と雖、日清の和衷協同は斷じて之を望む可からず。

日本支那間には此仇敵心の存するに因り、蒙古人種の合體論の成立せざるは明かなり。况んや、日清交戦の後に於てをや、敗北の清國、何れの時か日本の大打撃を忘るべき、熱、清國人の性情を考ふるに、彼は必ず日本の仇敵に報ひ、會稽の大耻を雪がんとし、臥薪嘗膽、經營に心を潜め、自今十歳の後は十分、國力を恢復し、舉國の英鋒を集めて大に日本に拮抗せんとすべきは、實に推測するに難からず。此時に際し、日本は曩きの清國に均しき逆境に陥るべきは、蓋し自然の數ならん。

蓋し、清國は近時、能く内治外交の困難を脱し來り、今や内外共に好時機に臨むものなり。然り而して清國內には、未だ外面に現出せざる一種の潜勢力、磅礴たるは、寸時も吾人の忘却す可からざる所にして、此潜勢力たる、後來、獨り日本のみならず、フランス及び我ロシアも共に之が影響を蒙り、大に其利權を滅殺するに至る

べきを保せず。故に日露間に現在せる親交を打破し、却て我ヨーロッパの敵視國の下に監視され、我國とは古來國交不良なる清國に向つて結托すべしとなす論者の如きは、實にロシアの亂臣賊子と稱すべきなり。

斯かる論者の努力は、必ず徒勞に屬すべし。日本國民に同情同感を表するは、一朝一夕の事にあらず。其和親は極めて鞏固なり。鉛槧操觚の輩、或は何故かロシアを怨惡せる日本人大石氏の如き、如何に毒筆を弄すとも、豈能く日露の和親を破るを得べけんや。かのフランス國內には、ロシアに向つて猜疑を抱くの論客多く、且つ、其政府部内にて、何故にや我國に不遜を懷き、常に我を辯難するもの少なからず。雖、以て露佛の親交を阻害するに足らず。之と均しく、歐米心醉者たる大石氏一個の邪推は、以て日露の同盟に、幾分の妨害をも及ぼすに足らざるべし。否、到底、日本より我を離隔せしむるの力を有せざるなり。

是を以て、かの著名なる「貪慾のロシア」と題する記者、大石氏と雖、又イギリスの資本に依りて發行せる日本の新聞紙と雖、俱に吾人を驚かすに足らず。吾人は之を目して、ヨーロッパに於ける我敵視國の邪智陰謀の結果に外ならずと見るも不可

なし。武士的正直なる日本帝國は、其明敏なる腦裏に、我武士的正直なるロシア帝國と同盟するの有益なるを確認し、東洋に於ける該帝國の利害は、常に我國と之を一致せしめ、以て、緩急爲すところあらんとするを疑はず。吾人は、又日本が清軍を破り、全勝の偉功を奏する曉、臺灣、并に他の領地を獲得するを以て、甘んじ、必ずや東洋争端の寶珠たる韓土に手を下すが如きことなきを信せんとす。

記者はなほ進んでイギリスの東洋に於ける關係に論及せり。
イギリスの東洋に於ける野心の爲めには、日本の發達及び韓國の獨立は甚だしき妨害物なり。然るに日本本來の目的は韓國の獨立を固くするにあり。ロシアも亦之と境を接するが故に、成るべく韓國を扶けて我國利を計らんとしつゝあるを以て、イギリスとは全く利害を異にせり。イギリスは専ら清國をして強大ならしめ、之を教唆して日韓露三國の進退を拘束せんとす。雖、今や折角の此計畫も水の泡に歸じ、清國は大打撃を被りて悲境に沈淪せり。憫むべきは清國にして、笑ふべきはイギリスと云ふべし。これまで弱小と侮りし日本は、強大なる清國と戦ひて海陸並びに大勝を得たるを以て、イギリス人をして聊か其意外に呆然たら

しめ、彼等は今や從來の政略を一變せざるを得ざるに至れり。思ふに、かくの如き政略の激變は、貞操なく、堅守なく、良心麻痺し、道義の念の消え失せたるイギリス人としては、未だ深く怪むに足らざるなり。

戦ひの清國に不利なりと見るや、イギリス人は早くも、日本人の甘心を得んとし、暗に之を助けんことを申し出で、且つ、東西兩ブリタニアの帝國にして、他日、世界に雄飛せんと欲せば、須らく和親協同せざるべからざる旨を説けり。タイムス新聞の如きも、其社説に於て明言して曰く、吾人は宜しく日本の戦勝をして完からしめざるべからず。若し本件に干渉して其美果を收むるに害を及ぼさんとするものあらば、イギリス人たるもの、極力之を排斥せざるべからずと。所謂、害を及ぼさんとするものは、我ロシア及びフランスを指したるなり。

イギリスの政略は、韓國を日本の保護の下に置いて、一時、ロシアの韓國に於ける利益を蹂躪せしめ、やがて日本とロシアとの相争闘するの隙に乗じ、此東洋の寶物を横奪せんと期するものに似たり。之を今日の状勢に徴するに、此苦肉の計が果して的中し、得べきや否やは、吾人の疑ひなき能はずと雖、若し日本にして戦勝

に眩惑することなくんば、必ずやイギリスの爲めに誤まらるゝことなかるべし。果して此くの如くならば、イギリスは又直に變節して清國に近邇し、之を援助することなすと云ふべからず。吾人は暗目して之を觀察せんと欲す。

我ロシアの極東に於ける利害は、イギリスと絶對的に相反するを以て、太平洋沿岸に於て彼と結ぶは甚だ不得策なり。若し彼と提携する時は、我國の利益も悉く彼の奪ひ去る所となるなきを保せず。勿論、日清戦争の終局の如何を問はず、韓國問題の解決に就きては、吾人は、其隣國として、必ず發言權を有すべしと雖、さればとて敢て日本を除外すと云ふにはあらず。日本は素と韓國獨立の主唱者なれば、此正義硬直の人士と接合し、以て此問題を宜しきに處決するは、理の當然と云ふべし。只彼のイギリス人の如きに至つては、韓國に於ける其利害は極めて尠少なるものなれば、慎んで之を傍觀し、妄りに容喙するの權利を有せざるなり。若し彼等にして其分を超えて、微々たる商業の保護を口實とし、戰略上の要地たる巨文島を占領せんと欲するあらば、吾人は斷じて之を容赦すべからず。我艦隊は太平洋、印度の兩洋に於て、同時に彼に痛撃を加へ、之をしてまた起つこと能はざるに至

らしむべし。我ロシアは多年、平和の政略を守り、敢て平地に波を起すものにはあらざれども、其平和にも自ら一定の限りあり、事の苟も我國權に關するものに至りては、決して之を假借すること能はざるなり。

記者は歴史的に日本とロシアとの國交の平滑なりしに徴し、又日本人種の友情に徴して日露の兩國が互に堅く相聯結し、以て極東に於ける問題の解決に當らざるべからざるを云ひ、又清國及びイギリスを以て、到底ロシアと事を共にするの徒にあらざるを斷せり。但し彼の所謂、日露同盟論は一の條件附なり。彼は、日本が韓國の獨立を確保するに同情するものなれども、日本自ら韓國の誘導の任に當らんとするを喜ばず、日清戰爭の結果、日本が極東の群島に其版圖を擴むるは異存なしと雖、なほ進んで大陸に指を染めんとするには絶對に反對するものなり。これ日本の斷じて甘諾する能はざる所なるに、日韓關係の歴史に迂なる記者は、日本は決して韓國を併呑するの意なしと恣に前提し、以て日露同盟の議を建てたり。日露同盟論は、快心の案たるには相違なきも、記者の説明は餘りに獨斷に過ぎたり。此點に於て、ジェー・モーリスは全く之と反對の

議論を提唱し、韓國は宜しく之を日本の教導に放任すべしと云へり。彼は日清戰爭の際、一八九四年、韓國に於ける戰爭なる一書を著はし、先づ、戰爭の起因を叙し、又其來るべき結果の如何なるべきかを想像したり。彼、其戰爭の結果と題する章に於て述べて曰く、

日本は太古より韓半島と關係あり。自ら、社會的に政治的に之を改良するの使命を負へりと自任しつゝあり。現在の戰爭にして日本の勝利に歸せんか、彼等はその明治の初年に於て自ら經驗せる所に應じ、必ずや韓人をして強ひて西洋の諸制度及び發明を採用せしむるに至るなるべし。

韓國は其鑛山の富を開かんが爲めには誘導の必要あり。由つて日本人は、先づ京城と濟物浦とを結合する鐵道を敷設し、之に次ぎてピンハイと京城との間にも金山地を通過する鐵道を敷設せざるべからず。韓國より毎年日本に輸出せらるる黄金は二四〇〇〇オンスに達しつゝあれば、金山の開掘は交通機關の整ふに従つて、今後益々有望なりと云ふべし。又敦賀よりピンハイまでの汽船の航路開く時は、こゝに始めて東京と京城との間に直通の途を見るに至るべきなり。

韓國は必ずや其導手あるを要す。而してこはロシアなるべからず。若しロシアにして之に當らば、ヨーロッパ列國は決して之を默視せざるべし。又そは支那にてもあるべからず。支那は從來其外藩たる韓國を利するを忘れたればなり。而して日本は最適任の導手たり。早晚御門の臣民は、此隱遁王國に明治の治世を布くことあるや必せり。而してこれ韓國の幸福と云ふべきなり。

戦果のことに到達せんことは、日本國民の擧げて希望する所なりしと雖、未だ俄に此くの如きを得ず。遂に十年後の日露大戦を待たざるべからざりしは、是非なかりしと云ふべし。これよりロシア人の日本に對する恐怖心は大に増長するに至りしなり。

四六、フォン・プラントの日清戦後の政局観

前にも掲げたるドイツの前日本公使フォン・プラントは日清戦後、明治三十年に於て、東アジア政局の三箇年（一八九四年—一九七年）日清戦役及び其結果に關する論文なる一書を公刊して其日清戦争観を述べたり。氏は前章にも既に記

したる如く、長く日本及び支那に在任し、極東の政局には眼識ある人なれば、其言ふ所、又大に注意すべきものあり。記者は先づ、一八九四年（明治二十七年）四月より同年七月に至る日清關係を其端緒とし、同年八月より翌年四月、媾和條約締結に至る迄の戦争の状態を述べ、轉じて同年五月乃至翌年十月の宮廷政變に至る兩國關係を述べ、これより更に一八九四年五月より翌年五月までの日清兩國に對する列國の形勢を叙し、又一面に於ては一八九四年六月乃至一八九七年二月即ち韓王、ロシア公使館を去るまでの日本ロシア關係を細叙し、終に結論して左の如く云へり。

日清戦争の來歴及び結果を觀察し、過去を以て將來を推すべしとせば、次の如き事實を想像するを得べし。

日本の清國と交戦せしは、内政の困難を免れ、朝鮮を己れの掌中のものとし、列強、殊にロシアの勢力を、東アジアの關係より除き去らんが爲めなりき。幸ひにして戦争は内紛を鎮定したるも、日本の朝鮮に於ける勢力は幾ばくならずして打ち破られ、ロシアは新に支那の代りに出で來りたり。現在の所にては、兩國の間に別

段に衝突の虞れなしと雖、日本にして陸海軍の擴張を實行し、ロシアにして又、シベリア鐵道を完成し、又之に附帶せる北支那との連絡を完うするに於ては、争は又免るべからざるに至らん。日本は、軍備擴張、及び臺灣割取のために其豫算は急劇に膨脹し、地租の如きは著しく増徴せらるゝを以て、下級の貴族、及び智識あるも、貧にして兎角に、事を好む煽動家の如きは、これを好機として現状の攻撃に餘念なきに似たり。

健忘なる支那は、最近の戦争の一切、或は殆ど其部分を既に忘却し居れり。彼は又これよりして何等の學ぶ所あるなし。其財政は、彼が日本に拂ふ償金及び軍備充實の費用の爲めに痛く紊亂し、其外債は既に四億圓に上れり。此外鐵道公債を除くも、尙、一億六千萬圓の募債を要するに拘らず、最も確實の財源たる海關税は、銀の下落によつて大打撃を受けしを以て、之が結果として内地の購買力を減少せしこと大なり。勿論、此窮境を開くべき適當なる手段なきにあらずと雖、改革を行ふに最も便なる上流の學士社會は、如何せん、大勢を達觀するの明と、之を行ふの果斷なく、又青年學士社會は、多くは外國輸入の新智識を有すと雖、之を實行する

所以の手段方法を理解せざるなり。されば支那は、大國として世界の政圏内に主動的雄飛を試みんとすとも、なほ不可能と云はざる可らず。

ロシアは別に日本と衝突せずして、巧みに朝鮮に其勢力を擴め、又政治的に且つ、經濟的に支那をも己が藥籠中のものとなさんとしたり。シベリア東部に於ける其鐵道の布設は確かに、南方にロシアの威力を及ぼす所以のものたるべく、一八九八年を以て完成すべきサマルカンド・アンヂジャン線及び其タシケンド・ノイ・マルゲラン支線によつて、ロシアの勢力を支那領トルキスタン、及び西部蒙古に及ぼすべきが如し。

フランスは、止むを得ずして日本に對してロシアと同盟せり。其後、北京駐在公使の發意によりて、一意、自國の利權を擴張せんと計り、其利益及び勢力範圍を眉江の左岸まで及ぼし、後、印度に八十萬平方キロメートルの新地方を得、其商工業は今や南清の諸州、兩廣、雲南、四川等に及ぶに至れり。此くの如くフランスは政治上に於て成功を得たるに拘らず、商業上の活動の未だ伴はざるの觀あるは、蓋し同國政府が海外貿易の不振に力を添ふることを拙なるを以てなるべし。

イギリスは東アジアの政局に於ては常に狐疑的位地にあり。ロシアとフランスとの進取的政策にも黙然たりき。西江の開放は彼が唯一の成功にして、これ十年の間、努力せる結果なり。彼は今なほ雲南、四川方面に其利益圏を弘めんとしつつあり。

合衆國は支那、日本、朝鮮の間の交争に關して、常にヨーロッパ各國と離れて行動し、自ら仲介者の位地に立たんとするの主義を探り、而して日本に向ひては殊に公然同情を寄せ來れり。

ドイツは新に土地を支那に租借したりと雖、わが帝國議會は今日に及ぶも、未だ航路補助の問題を議するに至らず。思ふにドイツが他國の海陸上の劇甚なる競争に衝らんと欲せば、政府の航路補助は、必要缺ぐべからざるものと云ふべきなり。

このドイツ人の觀察と相並びて最も注意すべきは、ロシア人の日清戦役に於ける日本觀なるべし。

四七、日清戦後の日本財政觀

日清戦後に於て、日本の財政の困難は、世界公然の事實となり、其爲め日本の外交上に於て招く所の不利少からざりき。外人は以爲らく、日本は元來國民の蓄貯多からず、而して日清戦役に於て政府は陸海軍を擴張し、人民も亦多くの新事業を起したるために、政府の歳出倍加して、併も歳入は之に添はず、人民の資力は多く固定資本に投入せられて餘裕なきに、輸出入は不平均にして經濟社會の前途暗澹たるを以て、國民は到底戦争をなすに堪へず。これ日本が北清事件、及び滿洲問題に關し、常に慎重の態度を探り、ロシアの進取政策に對して、充分に抵抗する能はざる所以なりと。一九〇一年(明治三十四年)五月五日のフランス外交週報(メモリアル・デ・プロマチック)の論ずる所左の如し。

心ある人は日本が北清事變の始めより比較的に薄弱なる地歩を取り、又眼前にロシアのシベリア及び滿洲鐵道、一旦竣工せば、ロシアの其滿洲に於ける地位は殆ど抜く可からざるものとなるをも知りながら、敢て之を制止せんとせざるは、

果して何の故なるや怪むべし。蓋し其然る所以のものは、日本が三國の干涉に會ひて止むなく清國の利己的開發者と爲るの夢想を捨てたる以來、其政策も一定する能はずして、方向に迷ひつゝあるに因ると雖、獨り是のみにあらずして、又兵制改革未だ完了せず、且つ其財政上の事情の困難なるに因る所も亦多し。

日清戦争の後に於て立てたる陸海軍擴張、及び事業計畫は、莫大の費用を要し、一八九五年以後歳出は頗る三倍せり。其前は一年の支出、約八千萬圓なりしに、一八九五年度の豫算に於て一躍して、一億千八百四十萬圓に昇り、今回議會に提出せられたる一九〇一年の豫算に於ては、二億五千五百四十萬圓に達せり。此くの如き膨脹に對して國民の被る負擔の極めて重きは言を須たす。但し陸海軍の擴張にして一旦、結了するとき、支出の上に減少を見るべく、且つ實際は、清國より受取りたる償金を以て其費用に充てつゝあり、其額は既に三億六千五百十九萬五千圓に上れり。然れども、此資金は唯減少するのみなれば、日本の政治家たる者は、固より慎重節用せざるべからず。

蓋し近年に於て國家經濟の資源も亦大に増殖し、之に従ひて通常税額も五年内

に二倍したるは事實なり。現在に於て主なる収入は左の如し。

地租	四六、五六一、〇〇〇
所得税	五、六一八、〇〇〇
營業税	六、一四二、〇〇〇
酒税	五五、〇〇一、〇〇〇
海關税	一五、六二八、〇〇〇
郵便電信税	二四、六六六、〇〇〇
國有鐵道收	三、一七〇、〇〇〇
煙草税	九、五四二、〇〇〇

之を見れば、租税の國民の生産力を害することを極限せんとするの目的を以て巧みに其法を定め、且つ其過半は、軍事費に充てずして之を生産的事業に使用せり。然れども、此上に支出を増加するの不可なるは固より明かなり。國民經濟の狀態は好望ならず、輸入は多く超過するを常例とせり。この問題は、獨り新規に起したる工業の爲めに、諸機械を海外より購入せることのみを以て説明す可らざるも

のあり加之、人民生活の状態は、漸く一變して必需品の代價騰貴し、従前の四割乃至十割を加へたり、是に於てか、初め非常に安値なる勞力を以てせる起業に於て、豫期の大利益は起らず、工業の發達甚だ遅々として、日本は既に融通資本を餘さず、其初めより多くを有せざりし資本は既に悉皆投入せられ、全く不動的の性質を帯ぶるに至れり。併も日本は、未だ外國の資本家に依頼することを好まざるなり。是を以て、若し此上に多く費用を要するときは、歳入及び國民の富資は之に伴ひて増加するを得ざるや明かなり。若し日本にして大戦争を爲すとあらんか、別に設備する所の資金あるにあらざるよりは、財政上大悲境に陥るの恐れあり。但し、諸外國の結局、日本を救ふこと或は之あらむ。併しながら其條件如何を問へば、必ず外債の途を以てするの外あらざるべく、此上に外債を募るは、大に思慮すべきことなるべし。况んや、日本の信用は甚だ確實ならず。先年、ロンドン市場に於て試みたる小公債の景氣は、甚だ好望なりと謂ふ可からざりき。是を以て、日本の政治家が其國をして早計に事を起さしむることを避けんと欲するは道理に合へり。ロシアが日本の到底一步も譲る能はざる朝鮮に關しては、十分ひかへ目になし

つゝあるに於ては、猶更、然らざるを得ざるなり。

これ財政上よりして、日本が外交上、兎角に強硬なる進取政略に出づること能はざるを證せんとするものなり。之と同一の議論は、ライジング・サンなる匿名を以て一九〇三年即ち明治三十六年秋、日露の危機が頻に世に傳へられつゝありし頃、フランスの外交植民雜誌に於て唱道せられたり。論者は其日本財政觀を統計の上に立てたれば、其論據、世の常の批評家の如くに杜撰ならず。論者曰く、

日本にしてロシアと開戦せば、遂にフランスをも敵とせざるべからず。幸ひにして日本の勝利に歸するとするも、これが爲めに日本の經濟的生活は長く沈衰し、外國貿易は甚だしく阻礙せられ、軍費の重荷に堪へず、漸く萌芽を出したる各種の工業、航海業等は、大悲境に陥るべく、加之、ロシア、フランスに向つて土地の割讓又は償金を強要する如きは思ひも寄らず、永久ヨーロッパの二強國を敵とせざるを得ざるべし。徒に日英同盟を恃みて、イギリスの爲めに利用せらるゝを悟らざらんば、遂には國家的倒産を爲して、起つ能はざるに至らん。見よ、一八九三年より一

九〇〇年に至る過去八年間に於ける日本の財政は、軍事費總額十五億萬法（一法は約四十錢として換算せり）政費十六億萬法以上に達し、其豫算は一八九二年乃至一九〇二年の間に於て、一億九千二百萬法より六億七千六百萬法に膨脹し、國債は二倍し、陸軍經費は三倍し、海軍經費は四倍し、而して租税は十七割五分の増加を示せり。日本の外國貿易は一八七二年に一億三千萬法なりしに、一九〇一年には十二億七千萬法に上り、則ち、八十七割六分の増進を示し、輸入は五千四百萬法より六億四千萬法に上り、輸出は七千八百萬法より六億三千三百萬法に上れり。世界の經濟史を繙くに、此くの如き輸出額増進の狀況は、實に異例に屬せり。

ライジング・サンは此くの如く日本の經濟的發展の驚異すべきものあるを前提とし、之が例證として絹糸、綿布、其他各種工業の數年間に於ける著しき發達の狀況を日本帝國統計年鑑に據りて仔細に數字を掲出して述べて曰く

此くの如き顯著なる進歩は、主として政府の保護的、補助的、干涉の結果なるを以て、國債は八年間に二倍となり、一九〇二年三月三十一日には、國債總額十三億千萬法となれり。而して一九〇二年十月、ロンドンに於て更に五千萬圓の公債を募

集したれば、イギリスに對する國債總計一億五千萬圓となれり。其他、日本帝國各種の地方公債を計上すれば、八千五百萬法あり。之を各國の公債に比較するに、敢て多大と云ふべからず。雖、納稅力の薄弱なる國に取りては、實に過重の負擔と云はざるべからず。日本の歳入三十八億法として、國民の富は總計二百八十億法と評價するを得べく、則ち一人に就き九十法宛なり。然るにアメリカは一人宛千百十二法、イギリスは九百十法、イスパニアは三百八十七法、ポルトガルの如きも亦三百四十法とす。而して日本國民の納稅負擔額は一人十二法七十五仙なれども、國民一人の富力二千五百法として、此負擔すべき義務五十五法に上るべく、之を外國に比するに、ミールハール氏の說に従へば、イギリスは一人二十七法七十仙、アメリカは二十二法五十仙、ドイツは三十五法、フランスは四十法、イタリアは五十二法五十二仙とす。其貯蓄力の如きも日本は一人宛僅々二法半にして、アメリカに比し百倍、ドイツに比して八十倍、イギリス、フランスに比して各五十倍、ロシアに比して尙五倍の少額を見る。

論者は、此くの如くに其筆を起して、日本國民の富力大に薄弱なる所以を叙し、

加之、近來、政費多端に赴き、大藏省は屢、證券を發行して一時を彌縫し、本年四月十一日には日本銀行よりの借入金一億七千萬法に上り、且つ銀價の下落と昨年の凶作とのため、大に經濟上、打撃を蒙りたりと説き、以上の觀察に基き、日本は既に平時に在りても、過去十年間に夥しき精力を糜盡して深く瘡痕を蒙りし上に、今後、彌久の六戦争を繼續し得る餘力、果して之あるかと論斷し、尙一步を進め、宣戰布告の日、陸海軍費として僅に六億萬法を支出し得べきも、是とても海軍準備金一億二千五百萬法と其他銀行貯蓄金の如きものを合せて漸く之れを獲べきのみ。一旦之を費消せば、同盟國たるイギリスの救助を仰がざるべからざるも、慳貪なるイギリスは、豈能く之を甘諾せんやと冷語を放ち、一轉して日本は宜しくロシア、フランスと親交を保つの利あるべきも、イギリス、アメリカの如きは反つて經濟上日本の大敵たる所以を絮説して曰く、

ロシア、フランス同盟は今日まで敢て支那、朝鮮に於ける日本の通商を阻礙せしことあらず。日本はフランスとの貿易に於て、輸入に對し六倍を輸出し、其ロシアとの貿易は、目下二千三百萬法に過ぎざれども、日露親交を結び、シベリアの内地

發達して、日本の供給を仰ぐに至らば、日本に取りて豈無上の華客にあらずや。ロシア、フランスは決して經濟上日本の恒敵たる能はず、寧ろ顧客たるべし。之に反し、イギリス、アメリカ、ドイツ三國の支那に對する利害の、常に日本と相容れざるは、今日事實の證明する所にあらずや。日本の眞正の勁敵は、イギリスにして、アメリカは更に恐るべき者なり。アメリカは、今や滔天の勢を以て、トラスト組織に依りヨーロッパの經濟界を席卷せんとせしも、ヨーロッパ諸國の封鎖政策に逢着するを慮り、鋒を轉じて東洋に向へり。日本第一流の經濟家にして商業會議所會頭たる澁澤男は、曩に世人に向ひ、我國を文明に導き、常に政治上我親邦たりしアメリカは、近き將來に於て經濟界に於ける我國の危険なる勁敵となるに至らんと警告を與へたり。日本は今に及んで其頑夢を破り、自衛の道を講せずんば、他日、經濟上、アメリカの奴隸とならざるを保すべからず。徒に敵意をロシアに挟み、イギリス人の狡猾に唆され、イギリスの暗に日本の零丁を庶幾するを覺らず、國力を糜して又起つ能はざるに至らば、賢明なる澁澤男の警告を如何せんとするぞ。論じて茲に到れば、日本はイギリスと同盟を結ばんよりは、フランス、ロシア同盟に加

はるか又は單にロシアと親交を保つての利なるは智者を待て後に知らざるなり。ライジング・サンは更に滔々數萬言を重ね、日本が現に支那、朝鮮及び暹羅の諸國に及ぼせる政治上、經濟上及び教育上の勢力頗る偉大なる者ある所以、黄色人種の柱石として極東諸國指導の重任を負へる所以を賞揚し、且つ日本が支那に對する經濟的經營の一大缺陷として、露清銀行、香上銀行の如き、經濟機關を有せず、正金銀行の支店一二あれども、頗る不充分なるを免れず、日清銀行法案は一たび議會に提出せられしも、半途撤回せられたるを惜み、日本が極東に於て此くの如き重任を負へるにも拘らず、若し一朝、ロシアと開戦せば、其結果獨り日本の經濟上の將來に重傷を蒙むるのみならず、延いて黄色人種の全體を危殆に陥らしむるに至らんとすの苦言を放ち、其結論を爲すに及び桂首相に囑望するに、曾我子爵の言を以てし、昔の武士は其第一資格たる甲冑刀劍を購ふため、食ふ物も食はずに年を過ごし、之を得て希望を滿たせしときは、既に身心疲憊し、冑を被り、刀を帶ぶるに堪へず、日本は之に倣ふべからずと云へる忠言に耳を藉さんことを庶幾し、尙賢明なる小村外務大臣もイギリスの瞞着的

政策を看破し、永く之と握手するのを非を發見したれば、日本がイギリスと袂別し、ロシア、フランスと、漸次親交を保つに至らんことを慫慂せり。

四八、ピエル・ルロア・ポーリューの日本に於ける 東洋文明の將來觀

ピエル・ルロア・ポーリューは、ロシア研究者として名あるフランスの學士、アナトール・ルロア・ポーリューの令息なり。經濟政治の論客として、又夙に名をなせり。氏一九〇〇年(明治三十三年)「アジア更新論」なる一書を著して、之をシベリア、支那、日本の三篇に分ち、氏が東洋に關する意見を詳述したり。其日本篇の中、日本に於ける東洋文明の將來なる一章は、最も注目の價值あれば、こゝに之を抄譯すべし。

日本研究者の何人も大なる疑問に陥るは、かゝる前代未聞の變改は、果して根底あるものなりや、果して永續の性質を有するものなりやにあり。耶蘇紀元前三世紀乃至六世紀に於て日本人は支那文明の斷片を輸入したり。されど、日本人は人

種學上より云へばマライ人なれば、白人よりは支那人の方に近きものなりと雖、彼等兩民族の間には、尙、アリア人とセム人との間に存在せるが如き懸隔あるを見るなり。但しこゝに忘るべからざる歴史上の一大事實あり。そは我西洋の文明の決して一人種の專賣物にあらざること。是なり。何となれば、之を作成するに於て異なる種々の人民が骨折りたるものなればなり。

又今日の人種學は言語學及び人類學の輓近に於ける發見のために、人類の始源地に關して、これまで廣く行はれたる思想を打ち破れり。人類學者は云へり、今日ヨーロッパに普ねく存する人種の發生したりし地は、アジアの高原ならずしてヨーロッパの中央にあり、アリア人はヨーロッパの住民の大部分をなすにあらずして、僅に其一成素たりしのみ。到る處にて土着の異民族と雜合したるなり。各地民族にそれらの特色ありて必ずしも同一ならざるは、雜合したる民種の如何に原因するものなりとす。されば世人の信せし西洋人民の人種的統一の考は、これ虚妄に外ならざるなり。

かゝる議論は姑く之を措くも、ともかく、一民族が他民族の文明に開化すること

能はずこのことは、首肯しがたきの說なり。勿論、日本人は、ロシア人やアラビヤ人や、將支那人自身よりも、一層西ヨーロッパの人種とは異なるものあれども、若し人類の同一起源てふことを許容せば、こは要するに其發生の度の問題に外ならざることなるべし。異人種間に文明を移植することは、其兩人種の誕生の關係の何ほどの度を超えては、不可能なりと云ふが如きは、之を一定するを得るか。これ經驗によりて之を證するの外なからん。

然るに吾人の眼前に、現に此一大事實の行はれつゝあるにあらずや。日本人は實にかゝる大なる力を有するものなり。彼等は智慧あり、著しき同化力あり、又恐ろしき企業心と精力とを有せり。此點に於ては、日本は素より支那と比較すべきにあらざるなり。其文明は支那よりは幼稚なりと雖、日本人は支那人の如く過去に執着することなく、西洋諸國の如くに、今や其封建の羈束を脱して、進進せり。

日本はかくして必ずや、すべての點に於て西ヨーロッパの諸國と相齊しき位地に到達せんと欲す。改革の主張者は、殆ど全般の革命に類せるまでに急進的に突進し、絶對の孤立を解きたるばかりの境遇を以て、早くも兵事的に、又經濟的に列強

と競争するに足るべき地歩を占めんとしたり。彼等は他のすべての東洋人とは異りて、此目的を遂行すべき所以の事情を熟知したりき。日本が此求むる地位に到らんが爲めに、必要な變改は何ぞや。ヨーロッパと同じく強國たらんとせば、如何なる點までヨーロッパに模倣せば可なるか。此點に就きては、日本人は其家庭生活の若干の習慣、家族制度の若干の點、及び宗教を措きては、殆どすべて西洋を模せざるべからずとなせり。殊に宗教に就きては、こゝには奇なる風あり。從來日本人は他國の文明を模せんと欲すれば、又必ず其宗教をも輸入し、由つて千五百年前には、佛教を採用して支那文明を輸入するの途を開きたり。十六世紀に於て、其西洋人と接觸してよりは、耶蘇教も新に入り來りたるが、今日の日本皇帝は、すべて信仰の自由を許して其何れをも排斥せざるなり。然れども何れかと云へば、宗教を以て西洋文明の第一の要素なりとは思惟し居らざるが如し。寧ろ科學的の發明、物質上の改善の方に重きをおきて、何よりも第一に政治上、社會上の問題を解決せんと努力しつゝあり。

民事上に於ては、日本人は大にヨーロッパの風を模せり。日本の社會は之を家族制

度の點より見れば、大に古代の社會、殊にローマの社會に近似せり。新民法は全く西洋の風に従ふにはあらずと雖、大に西洋の形式に倣ひしは、智なりと云ふべし。之によれば、家長の既婚の子及び弟妹に對する權利は縮少せられ、女子の位地は高められ、又日本の傳習によりて私生兒と嫡出兒との間には、西洋諸國ほどに大なる差違を見ざるなり。かくて日本の諸法はヨーロッパのそれにちかより、財産制度の如きは殆ど吾人の制と異ることなく、刑法の如きも、世界の最も寛大なる法の一にして、死刑なども、皇帝に對する犯罪の外には大に輕減せられたり。

政治上に於ては、日本人はしかく急進せずして、プロシアに類せる立憲政治を建てたるが、要するに、日本の國會も此八年の間に大に發達し、ヨーロッパに於ける國會中、其最も新設にかゝるものよりは、劣等ならざるに至れり。尤も政黨はとかく、に不定にして、其政綱も混亂し、藩閥の關係が政柄を握るの有様なれども、こはもと早熟の產物なれば、經驗と共に其成功を得るに至らんこと必せり。町村や縣の議會も亦、相當の成績あり。又、腐敗と云ふ事も多少耳にせざるにはあらざれども、世界何處にか腐敗の事實なからんや。

日本の改革中にて最も仕合せなりと見ゆる一事は、ペテロ大帝がロシアに於て行ひしが如く、國民を二つの階級に分ち、しかも其間に超ゆべからざるの濠渠を置きしが如き拙策に出でざりし事にあり。こゝには、ロシアの農民に於けるが如く、日本の農民を劣等の境遇に沈淪せしむる隷屬てふ事實なく、一千二百年乃至一千五百年の長き文明に琢磨せられたるを以て、御門の人民はペテロ大帝の臣民の如くに文盲ならずして、共に進歩の途に進み、土地狹隘にして人口の豊饒なるがために、國運發達の大動機たる新思想は、容易に全國に流布せられ、國民教育の普及と共に大に文化の發展をたすけたり。

其變化の最も急激なるは物質上の方面にあり。工業の非常なる進歩は、之を絮説せずとも、こゝに一事例の以て其大要を示すべきあり。日本人は西洋の輸入物をば貧民に廉價にて利用せしむる様、巧みに施設するの能を有せり。多くのヨーロッパの植民地にては、鐵道及び郵便の賃銀は甚だしく高められたれば、土人は之を利用せんにも大に不便を感じつゝあるに、日本にては却て極端に之を低減せり。鐵道の賃銀は、爰にては一等は一哩三錢、二等二錢、三等一錢の少額なるに拘らず、

其全線三二六〇キロメートルの總収入は、一八九五年に於て一千八百七十八萬六千圓に上れり。此中、一千一百七十九萬六千圓は乗客の料金にして、此収入に對して支出は七百六十六萬三千圓に過ぎず。されば純益は一千一百十二萬三千圓となりて、敷設の費用、即ち一億一千六百四十九萬二千圓の一割に達せり。郵便税は日本にては尙更に廉なり。手紙の税は二錢、即ち五サンチムにして、葉書は一錢、即ち二サンチム半なり。郵便物の數は非常に多く、一八九六—七七年に於て五億三百萬の巨數に上れり。其中、葉書二億六千三百萬、手紙一億二千二百萬、新聞八千七百萬なり。葉書が此國に於て他國に於て見るよりも、手紙の數に超過したるは、其廉なるが爲めに外ならざらむ。一八九九年、郵便税は少しく増加せられたり。日本にては國民一般に新文明を輸入せんと熱心し居るを以て、改新は急速に行はれつゝあり。新大學其他すべての學校には、驚くべき多數の學生が集りつゝあるは、これ又其西洋文明の同化に銳意なるを示す所以のものなり。中にも青年の多く歸依するは應用科學、醫學及び法學なり。此等の學士の中には、既に一かごの成功をなせしものもあり、黒死病の菌を發見せしは日本人なり。人往々にして日

本人には創始の才なしとて之を非難す。これ或は然らん。されど然らば今日、西洋文明の頭に立ちつゝあるイギリス人、アメリカ人は所謂創造の大なる精神を有するものと稱せらるべきか。決して然らず。近世の大発見をなせしものは、殆どフランス人及びドイツ人のみにして、イギリス及びアメリカにて纔に之が應用を完成したるのみにあらずや。巧みに適用を完うするの術に於ては、日本人も決してこれなしとは云ふべからず。彼等は現に、嘗て其巧みに支那の文明を輸入消化したりし如く、今現に西洋の文化を同化しつゝあるなり。

日本人に危険なりと思はるゝは、其あまりに早く西洋の事物を理解したりと輕信することにあり。彼等は今やしきりに外人の顧問教師を解雇しつゝあり。十八世紀の間、ロシア人は多くドイツの學校に遊びたりき。日本があまりに早く西ヨーロッパの教師と手を分たんとするは不可なり。現に郵便にも鐵道にも不秩序あり、遲滯あるにあらずや。然るに彼等は之に與ふるに笑ふべき説明を以てするなり。通信物及び旅行者の突飛なる發展に對して、役員の不足なるあり、複線の完からざるあり。經驗の乏しきを以てしては、すべてこれ等の缺點を補習せんこと難

しと云ふべし。すべて几帳面と時の精確とは、近代文明の特色たるものなるに、日本は東洋在來の風として、これに慣れず。而してかゝる觀念を習得せんは、決して短日月の能くする所にはあらざるなり。工業、商業、財政等の事務に於ても、銀行會社の取引に於ても、未熟の節々あり。又往々に信用缺乏の聲を聞く。

日本の内地旅行に於て外人の遭逢する困難は、決してしかく重大なるものにあらず。一八八九年より此國に於ては外人に反抗する運動起りしが、一八九六年に至りて其頂點に達し、今日は大に減少せり。かゝる反動をおこせし原因は多々あり。雖、其一は、外人の條約改正問題に對する態度にありき。此問題は今や漸くに解決せられたれば、今後、これが爲めに日本の進歩の利益を被ること尠からざるべし。

王政復古の殆ど翌日よりして、御門の政府は、列強と舊制時代の末年に締結せられたる條約を改正するの希望を言明し、殊に外人に與へられたる治外法權を撤回して、日本法衙にて一切の裁判事件を裁斷せんことを求め、又頗る低率に決定せられたる海關稅は、敢て保護主義の目的を以てするにあらず、單に收入を増す

の目的を以て之を變改するの自由を得んことを望みたり。其代りには、彼等は外人に内地を開放して、何處にても其居住するを得べからしめ、さきに開きし五港の外に、工業をも内地に興すとを得しめんとしたり。此十七個の條約國との合議談判は、一八八七年に於て痛く内國の輿論を喚起せり。政府は之に顧る所ありて、各國との間に國別談判を開き、一八九四年、先づイギリスとの新條約を締結し、他の諸國とも續々、之を結びて愈、一八九九年七月十七日よりして新條約を實施することとはなれり。

日本人の多くの間には、外人に内地雜居を許し、又之に不動産所有の權を許可するを以て非常に危険なりと云ふの思想あり。此輩は外國人は吾人よりも富めるを以て、土地を己れのものとし、其他の富資をも專有するに至るべく、かくては、吾人は終に我國土の主たらざるに至らんと。然るに又一面に於て、開港場にある諸外人は、日本の司法權に服従するに、向つて大に反對の聲を揚げ、曰く、日本の法典は西洋の法典を範とするものなれども、其青年は未だ野蠻なり。彼等は外人を優遇せざるのみならず、只管、之を倒し、之をして結局、日本に滯留するを能はざら

しめんとしつゝあり。此等の愁訴は皆、誇張せられたるものなれども、其外交談判の進捗を妨ぐることを尠少なざりき。

ルロア・ポリーリューはかくの如くにして、日本の外人に反抗するの態度には一部に誤解あるを免かれざるを述べ、さて結論して曰く、

日本人は實に多くの仕事をなしたり。されどこは、僅に三十年の短日月の間に遂行せられたるを以て、其人民の大多數は、なほ、遺憾ながらヨーロッパの事物を了解するに至らざるなり。彼等は、比較の智識を有せざるがために、自國の驚異すべき進歩を誇大に感知するのみ。外國より舶來せるものにて、既に損敗したるもの存するを識別するを得ざるなり。元來、外國人と云ふものは、評家の役目にあたるものなり。其評言の假令、惡意を以てせらるゝことも、此役割は大に人に益あるものなり。然るに日本にては、青年を海外に派出し、官僚を遣して之をして評家の任に當らしめつゝあり。悲むべし、新來の文明は兎角に他との調和を缺ぎ、日本をして却て日蔭の草木の如くに萎縮せしむに至るべしとは。何國の人民にても、たとひヨーロッパ人にても、孤立を望みて自惚の心、嵩すれば、終には他の後塵を拜する

の運命を免かれざるものなり。吾人は決して日本の異常なる事業を誤解するものにあらず。日本たるもの、宜しく其國をして益、ヨーロッパ、アメリカの人民と親暱せしめ、之を玉成するに吝ならざらんことを。

氏の言は公平なり。大體に於て當を得たりと云ふべし。

日清戦役に至りて、日本が各國の注意をひけるの層一層なるは、以上の記事に照して之を知るべく、中には赧然たらざるを得ざるほどの過大の頌言もありたるが、其間にありて外人の概して悲觀に傾きたるは、主として我財政の前途にありしが如し。

四九、アーサー・デオシーの日本魂論

左に抄譯せるは、一八九一年(明治二十四年)九月四日、ロンドン、日本協會名譽書記アーサー・デオシー氏が、萬國東方會議の第九回大會席上にて朗讀せし日本魂論なり。所説、別に嶄新なりと云ふにあらず。間々、又誤謬を傳ふるも、外人にして日本の爲めに氣を吐ける所、亦一顧の價なきとせず。

茲に靈妙不思議の一玄機あり。此玄機は果してこれ何者なるか。之が定義を下さんと欲するも亦難し。雖、苟くも東邦の知識を考究する學者研究者に在りては、必ずや之を覺知せざるを得ず。日本知識の玄妙なる學問に於て殊に主要なるは、此玄機なり。

此玄機は、其發現する所の現象、千變萬殊なれば、學者の認むる所も、亦各相齊じからず。技藝家は之を見て日本萬般の技藝的事物に透徹する所の技藝的精神とし、軍人は之を見て日本歴史各卷各冊に記載せらるる所の、古來、武勇士人の勳蹟に存在せる者とし、歴史家又は人類學者は之を見て吾人の西洋文明と大に異なる所の特殊なる人文の發達に存在するものとなせり。

吾人にして、若し善く精密に此玄機の眞性如何を考察する時は、一八六八年、帝政回復以前に在りて、日本の國民的生活の一舉一動に於て特殊なる日本の精神なるものゝ存在せるを視る。此精神は、時としては颯風の如く勇將烈士を發生せしめ、危難を凌ぎ、萬死を冒し、勇武名譽を輝かしむべく、或は時として脈々たる和風の黄昏に吹き來るが如く、平和の時世に於て賢人君子の善行を顯發すべし。

此精神は是、何者ぞ。他無し。古代日本の精神たる真正大和魂即ちこれなり。所謂大和魂の本質如何は、極めて玄、極めて妙、以て名狀し難きなり。日本國の學者にして哲理的定義を下すことを好むの徒と雖、大和魂の精分を精細に説き明かし、之が解釋を與ふる者鮮なし。大和魂即ち古代日本の精神を説明すること最も簡明なるものは、蓋し第十八世紀の日本歌人本居宣長の和歌に如くはなし。而して其歌は、日本人民の老少となく男女となく擧げて之を誦誦する所なり。曰く、

敷島の和心を人間はど

朝日にはふ山櫻花

この和歌は善く其國民精神の定義を表明せるものとして、日本全國民の等しく推服する所にして、善く該精神の妙と其精神に對する國民の尊敬心を説明せるものなり。何となれば、山櫻は清嬌妍秀の花簇々として雲の如く、雪の如く、紅旭初めて昇り、曉風徐ろに吹く處、天香自ら薰るもの、是れ一幅、日本特秀の美景にして、日本人の心頭に眞善眞美の感を起すもの、これより鋭きはなければなり。然れども、日本の言語文字に通せざる吾人日本學研究者に在りては、何様の絶妙

なる好歌詩たるにもせよ、此歌の説明にては未だ不満足なれば、吾人は日本をこて既往數千百年來、世界稀有の奇なる文明を發達せしめたる、此日本精神、即ち近く二十餘年來、此國の政治的、社會的、革命的革命を生せしめ、歷史上無双の革新を致し、しかも其影響は、此帝國の四疆以外にまで及び、以て東邦幾億萬人の運命をも左右せんとする此日本精神に就きて、尙一層研究稽查する所あらむと欲するなり。吾人は日本精神に就きて、其性分如何、其起原如何、其効力如何を研覈し、しかも又將來に於ける其結果如何を推量せんが爲め、須らく先づ太古、載籍未興の時代より現代に至るまで、日本歴史上に於て發現せる此日本精神は、何等の状態、何等の現象を以て現はれたりしやを看察せざるべからず。但し此精神の發作に關し、日本歴史上に散見する所の許多の事例に就きて、其必要な例を選出せんが爲め、豫め注意して尋常一樣なる愛國心の場合を控除するの要あり。即ち何れの邦國、人民にも其古傳舊話に存在する勇武の奇談の如き、及び各國古代の戦争に行はれたる武功の如きは、一國の特有と認め難ければ、之を控除すべし。吾人の日本精神發作の事例として摘録すべきものは他無し、日本人に在りて極めて尊崇すべ

く、眞正日本人の行爲として彼等日本人の尊崇敬重する所のもの是なり。此くの如き事例の講究は、以て日本をして過去に於て、現在に於て、未來に於て、まさに此くの如くならざる可らしめし所の、大和魂なるものゝ知識を吾人に與ふるに至るべし。蓋し日本精神は、日本人全體共有のものにして決して其某種族が特有し得べきものにも、將た某の世、某の代に限られたる產出物にもあらず。吾人は日本上古史に於て、既に此精神の存在を見出し得べし。即ち日本精神なるものが決して一二種族の專有にあらずして、國民共通のものなるとは、其少童青年の教科書、或は家庭談話書に引用せられたる日本精神の先例によりて、天皇、皇后、大臣、參議、將帥、賢哲、智勇の士より以下、小商人、農夫、勞力者に至る迄、其人の素性如何に拘らず、苟くも其行狀の特秀にして日本魂の全部乃至一部を表するに足る者は、皆引用列擧せらるゝを見て知るべし。此事例中、單に武勇談に屬するものは、素より以て日本の特有と稱するに足らずと雖、其日本特殊の美德として觀るべきものは、日本國民的の勇士烈女にして、其行の克己的獻身的なるもの、公益の爲めに其生命財産を抛つもの、若くは義俠を以て弱小を扶くるもの、及び下に對する

の慈仁、或は上に對する忠愛の共に至誠より發するもの等なり。

公共的精神は、古來日本人の最も敬重する所たること久し。就中、其位地高貴なる人にして、能く公共的精神を發揮する時は、其衆人の尊敬を受くること彌博し。故に至尊の位地に立つ所の皇帝にして、最下の衆民を顧念し、其艱難疾苦を察するの仁君に對し、日本人の永く感佩する所の敬愛心の如きは、何等の言語を以てするも之を形容し盡すを得ず。かゝる仁君中に於て、其最も永く日本人の心底に銘するものは、仁徳天皇(紀元三百十六年)の遺事なり。これ所謂「高屋」詠歌の談にして、其歌は近頃サア・エドウキン・アルノルド氏之を英詩に譯出せり。蓋し仁徳天皇の其大和魂を顯はすや、蝦夷征攘の武勳に於てせず、高麗征伐の軍功を以てせず、亦内國叛徒の征伐に於てするにあらずして、唯貧民を憫れみ、これを愛憐する仁心に於てせられたるなり。大和魂の性分たる此に於て、其一例を見るべし。かのフランス歴代に於て唯一無双の仁君と推稱せらるゝヘンリ第四世は、其小民の困窮、其生活の貧窶なるを憫察し、曾て歎息して、嗚呼、願くは吾王國の人民をして毎日、一片の禽肉を食することを得せしめたと、のたまひしとありとかや。然れども

王は、單に人民の爲めに其生活の改良を冀望したるに止まり、其躬行を以て勤儉節約を厲行したるの實を聞かず。獨り仁德帝に至りては、則ち其仁愛の實行、遂にヘンリ王の上に出で、單に小民生活の困難を察し、之が改良を冀ふのみに止まらずして、躬行を以て之に先んじ、宮廷の用度を節限じ、租税の大部分を免じて以て人民の貧困を救済せむことを計られたるなり。帝の居住する宮室は、屋破れて雨露の侵入するも、之を葺かしめず、飲食は其淡を忍び、衣服は其粗に耐へ、以て人民の爲めに儉素を實行すること數年、民家爲めに其生計を一新することを得、炊烟天を覆ふを見るや、即ち皇后に謂つて曰く、天の君主を置くは人民の爲めにするなり。民の富めるは、則ち朕の富めるなりと。

戦功武勳とは別に於て、大和魂は、又國の爲め若くは衆人の爲めに、他人を救はんがために甘んじて其生命を致す所の日本人の普通氣象として顯はる。これ西洋の所謂博愛主義の一種なり。かの耶蘇教の本義たる、己れを捨て他人を救ふと云へるは、世界の多くの人種に在りては極めて了解に苦む所なるも、日本人の容易に之を解得するものは他無し、捨己救人、捨生取義と云ひ、殺身爲仁と云ふもの皆、

日本固有の通慣常習たればなり。此種の例中、日本の小兒までも知らざるなきものは、後醍醐天皇(紀元一三一九年乃至一三三八年)の不公平を諫め、之を開悟せしめんが爲めに、身を殺せし所の忠臣楠正成是なり。身を捨て國を救ふ、此くの如きは、嘗に日本に於て之を見るのみにして、世界他國に於て其比を見ざる所なり。故に楠正成の名は永く後世に傳はりて其國民的忠義の冠たり。忠義と云へば必ず先づ楠を推さざるはなし。

此外、又其目的の單純なる、其苦行忍耐の驚くべき獻身の例、枚擧に遑あらず。是等の獻身事業は假令、近時、ヨーロッパ風の糟粕を嘗め、輕薄にして、其祖先の質朴律義を賤下せんとする新日本の少壯日本人と雖、亦之を聞きて感奮せざるはなし。彼少壯日本人は自らオクスホルド或はケンブリッジの得業生と稱し、或はハーバード若くはベルリン大學の卒業生を以て自ら高じとするも、一度、佐倉宗五郎が獻身の傳紀を讀むときは、其血液の忽ちにして熱湧するを感ずるや必せり。

新日本の日本人の身に被る所は、西洋新様の衣服にして、其脚に穿つ所はボンド街製造の長靴なりと雖、江戸町人の組合頭領たりし幡隨院長兵衛(第十七世紀)が

義俠、他人を救ふが爲めに、從容として浴室内、亂槍の下に死地に就きたる舊話を聽かば、其心臓は鼓動して歇まざるべし。

西洋新思想の浸染する所となりたる新日本人と雖、忠臣藏義士四十七人の演劇を觀て、斷腸熱涙を洒がざる者は未だ嘗てこれあらず。此演劇は、獨り日本人の擧げて之を知らざるものなきのみならず、西洋學士の翻譯を経て、歐米幾萬人の敬讀する所たり。顧ふに其目的の堅確なる、其決心の誠實なる、其沈勇剛毅なる、日本忠義の美例として、四十七士の傳紀より美なる者は、古今未だ曾て之あるを見ざるなり。

以上列擧する所の二三の事例によりて之を見れば、日本語大和魂と云へる一語中には、西洋の愛國と云へる語中に含める意義よりも、猶一層、多量の旨趣を包括するものなるを知るべし。即ち此日本語に含める忠義的思想なる者は、一面は其君主に對する忠誠を表し、他の一面は封建君主に關する獻身、君長の爲めに其身を致すの義、所謂、人の祿を食むものは、其爲めに死し、一郷に在りては一郷の安危の爲めに、一團體、組合に於ては、其組合の安危の爲めに、朋友に對しては又其安危

を救ふが爲めに死力を盡すと云ふことを表するなり。

然るに歐米人、就中、かの日本帝國の開港場に居留する歐米人なる者は、日本大和魂の起源、其來歴の如何を考究せず、大和魂の眞性如何、其發作する所のもの果して如何をも考慮せずして、皮相淺薄なる見解を下し、日本魂なるものを以て一種、宗教的の頑迷妄執と視做し、之を擯斥し、或は然らざるまでも、日本人の攘夷思想の一種にして、所謂國民的自負を意味するものに外ならずと、苟くも此魂にして興起するあらば、速に軍艦を以て之に臨み、これを撲滅掃蕩すべしと謂へり。彼等外國人は、日本近時の文化開進を導きたるを、専ら泰西の軍艦、大砲に歸せんとするは豈、偏見誤解の甚だしきものにあらずや。

日本魂の眞義は此くの如きものにあらず。抑も從前、開港の初めに於て、日本人民の歐米人を嫌忌し、所謂、攘夷的暴行を逞うしたる所以のものは他無し、要するに、近古二百餘年來、海外の交通を閉鎖し、海上に孤立獨居したる結果として起れる人民の偏見に出づるのみ。日本魂の罪にあらざるなり。ヨーロッパ人が、此日出國新日本に旭光を導きたるは、下、關、鹿兒島兩度の砲撃にありとするが如きは誤謬な

りと云ふべし。知らずや此日出國は其開港より以前にありて、業に既に文化新興革新の機熟せるものなることを。當時草莽に湮没せる獻身的の先覺者は、夙に進んで文明智識を求めんとし、之がために其生命を致せるものさへあり。即ち此真正なる日本魂によりて、日本大革命の準備は夙に其端を開きつゝありしなり。日本鎖國の時代に於て、其献身的志士が七年の歲月刻苦を積み、以て日本オランダ、イギリス對譯字書を編輯したるが如き、文明先登の勳績は、世界學士の共に推重せざるべからざる所なり。彼が字書編輯に刻苦すること七年にして、其稿將に脱せんとするに際し、嚴冬の夜、燈前端坐、該稿の校正に従事し、既に四更を過ぎて疲勞の餘り、覺えず机案に倚りて假睡すること暫時、曉寒凜冽として肌膚に透るを覺えしを以て忽然、目覺めて机邊を視れば、何ぞ料らん、己れ多年の血誠を凝らして將に成るに垂んとせる對譯字書の幾千枚は、其坐睡一瞬の間に、誤りて火爐に陥り、一握の灰燼と爲り了らんとは。學士は慨歎に堪へず、天を仰ぎて長歎し、屠腹自裁と決心したりしが、稍ありて翻然として悟る所あり、其決死の心を翻して重ねて字書の編纂に従事し、再び刻苦すること三年にして、遂に其志業を完成す

ることを得たりこれ他無し、此人、其眞日本魂の充溢に頼りて、以て此至難の編纂事業を成就し得たるなり。

此字書編纂に於ける日本志士の逸事は、今を距ること三十五年以前に在り(一八六五年)而してこゝに起る疑問は他にあらず、此くの如き眞正の大和魂は、舊日本の精神に於てこそこれを見るを得べけれ、現代新日本に於てもなほ能くその事例を見るを得べきや否や是なり。吾人は之に答へて云はむ。曰く、現代日本に於ても、亦此眞正精神の存在することは明確にして疑ひを容れざるなりと。請ふ茲に其實例を擧げて以て之を證せむ。一八九一年九月一日出版のタイムスに載する所の東京通信を看るに、日本人の精神の堅忍不拔なる、しかも其公共的福利の爲めに身命を惜まざるの實例は、源綱紀氏の勉強に徴して之を知ることを得るなり。源綱紀氏は、東京に住する一貧學生なるが、ヒットマン氏速記術をば之を日本語に應用する方法を工夫し、刻苦十二年の久しきに亘り、百折撓まず、終に之を成功せり。今や同氏の門人が日本帝國議會の議事を速記したる所の議事録は、速に印行せられて、其議事の翌朝は必ず載せて官報に在り。しかも其速記の明瞭精

密なることは、世界各國國會議事録の上にあるなり。これ實に源綱紀氏の一大功績たり。然るにタイムス通信によれば、綱紀氏は此一大功績に對して日本政府が將に之に授與せんとする所の勳章、若くは褒賞を一切固辭して受けず、又、同氏は帝國議會の報告課長たることを勧められしも、是れ亦辭して就かず、氏は其門生に語りて、吾人は唯日本の爲めに働きたるのみ、我事業は成功せり、我願ひは達せり、また何をか求めんや、と言へりと云ふ。

此くの如き最近の事例は、現に吾人の眼前に在り。故に吾人は斷言することを得べし。曰く日本魂は依然として今、尙其活動力を日本に有するなりと。願ふにヨーロッパの風俗事物、日に東漸して日本に入り、日本國民の氣象性質も亦隨うて自ら歐風生活の水平線に低落しつつあるが如く見ゆるにも拘らず、又西洋風の鄙陋、貧慾、嫉妬、愚鈍、愚痴等の惡徳日本人の間に摻入するにも拘らず、日本人の心肝に於ては、古代日本の赫々たる火燄の今なほ燃焼しつつあるあり。思ふに既往に於て日本の爲めに無量の功績を奏したる日本魂は、將來に於て亦重ねて其効を奏し、山櫻花と共に永く旭日に薰映し得べきは、敢て疑ふべからざるなり。

日本魂を以て武士的精神にのみ限るものにあらずとするの見解は恰當なり。唯デオシーが、此種の精神氣魄を以て日本民族の特有物にかゝり、他民族の心理の到底、企及すべからざるものなりと論ずるに至つては、其言少しく日本に阿るに過ぐるの感なからず。我民族的精神の優逸なるは、近く日清、日露の二大戦役の明かに證據立つる所なるも、民性の前途に改善すべきもの尠からざるは、志あるものゝ決して無視する能はざる所なり。

五〇、ニコライの日本宗教觀

日本の宗教に就きては、グリッフィスに精細なる研究あれども、こゝには、日露條約締結後に於て、第一に日本に渡來し、在留五十年、最も我國の事情に通せるロシア日本正教會司教ニコライ師の見を掲載すべし。師は今後の日本は必ずや耶蘇教を採りて其國民の精神生活に一新生面を開拓せざるべからざるを唱ふるものなり。師は日本在來の宗教は子守なり、乳母なりと前提を掲げて其所見を陳べて曰く、

總じて之を云へば、日本の發達進歩は何れの方面も至極其宜きを得て間然せるを見ず。現に存する宗教界の混亂不振とても、要するに一時的の變象に止まるべく、遠からずしてアメリカ、ヨーロッパの現狀に迄進達すべきは疑ひなかるべし。日本今日の宗教中、神道は日本人に正直の性格を養成せしめ、儒教は禮節を教へ、佛教は慈悲を與へ、相待ちて大和魂をなせり。神道が八百萬の神を祭りて鏡を本體となし、穢へ給へ、淨め給へと己れの心を清淨にせんと力め、精神汚穢なるときは、神は之を受け給はざるものなりと教へし如きは、人に正直と潔白とを訓示せしものに相違なしと雖、宗教としては餘りに簡單にして、眞の造物主の何物たるを解明すること能はず。儒教が仁義五常の道を教へ、此日本人を禮儀敦き國民とせる功勞の大なるは云ふまでもなければ、孔子は、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんと云ひ、未來を口にするを避けたれば、これが宗教としての價値は誠に不充分なりと云はざるべからず。又、佛教の如きも只管世の實際に遠ざかり、宗教としての活用なし。此三道駢立して直に其缺を補ひ、以てこれまで日本の人心を支配し來りたれども、凡そ一人の夫は唯一人の妻が正當なる如く、一の國家も亦唯

一の宗教を有せざるべからず。神、儒、佛の三教が互に相扶けて駢立し來れるは、いづれも、宗教の完全ならざりしが故なり。もし完全なる宗教にしあらば、其中の一つにて十分なる筈にあらずや。現在、日本の精神界が亂世の如くに混雜せるは、素より當然の成行にして、これ聖ポーロがユダヤ教に代りし耶蘇教を評して、ユダヤ教は子守の役を勤めて其子を成育し、以て耶蘇教の母に遞せりと云へる如く、神、儒、佛の三道は幼稚なる日本人の子守役を勤めしに過ぎざるなり。今や日本人は、子守、乳母の必要なき迄の大人となり、耶蘇教の父母が直接に之を養育するを要する過渡の時代にあるなり。此腕白盛りの日本人は、今や小兒の衣服をすて、大人の衣服に更ゆべき時代となれり。更に他の譬を以てすれば、古き家、人の住むべからざる程に朽ち果て、自然に倒れ、而して未だ新しき家の出來上らざる時代なり。此古き衣服と新しき衣服、古き壞れ屋の材料と、新造家屋の材料とは、雜然として相混合せり。其見苦しきは當然なり。されど、これ決して失望すべきにあらず。何となれば、かゝる時代は東の間にて、早晚日本人に適當する新衣新家の成るは確實なればなり。

かゝる過渡時代の日本の事なれば、道德の一時破るゝも、これ又止みがたき現象なり。余の初めて函館に來りし時代には、人民は皆質朴にして、夜中戸を閉鎖せずして眠るも、盜難の虞なかりしに、今は如何に戸締りを嚴にするも、尙未だ安全なりと云ふべからず。且つ古昔の武士氣質失せて人々、只目前の小利のみこれ追窮するの有様なり。余の教會に屬する全國三萬六千人に就きて之を見るも、往時の士人たりし老人の方、今時の青年者よりも却て高き思想を有するが如し。今日の日本人は一般に宗教には至て冷淡なり。特に中流以上の階級に於て然り。されど人は到底人たらんとするの天性を有す。宗教は人の天性に基くものなり。曾て耶蘇教の起りし時にも、先づ之を信せしは下層の人民にして、中流以上のものは之を信せざりき。されどこは一時の現象なるべければ、余は決して日本人の宗教心に乏しきを悲ます。今の日本の學者政治家の一局部にのみ熱中して、宗教の一大光明に浴せんことを努めざるを傷むのみ。

元來教法なるものは、母親の膝下にある時よりして之を始めざるべからず。家庭に初まりて學校に及ぶべき筈なり。然るに日本が教育と宗教とを分離すと云ふ

事は非常なる誤謬にして、日本今日の患ひこれよりも大なるはなきなり。耶蘇教國に於ては三四歳の頃よして既に祈禱を教へ、人間として満足に世を渡り得べき基礎を作るなり。虚言を吐くべからず、盜むべからず、見えざる神が常に我座作進退を監視したまふ事を教へて、人として一生の行爲を支配すべき良心の根本を培養するなり。單にかくすればかくの結果ありと云ふが如き、交換主義の道德のみにては、何等の効力もなかるべく、這般の教育法によりて養成せられたるものは、變に臨みて己れの面目を保持するの抵抗力を缺き、爲めに往々見苦しき態を演ずるなり。

さりながら又宗教も兒童青年に向つて濫りに之が自由選擇を許すも害あり。これ自由結婚が理ありとて、極端に之を放任するの害と異なることなし。又各宗教共通の根本義に云ふが如き、漠然たる原理を標榜するも亦善きことにあらず。必ず最良の一宗一派を撰びて之を教育と結合せしめずむば、完全の結果を得んこと全く難し。

ニコライ師は、ロシア一流の國教主義の立脚地よりして、信仰の統一を主張し、

而して耶蘇教こそ此任に當るべきものなれと論ずるなり。されど、こは理想家の所論に止まるべく、三千年の由緒深き歴史を有する我國に於て、一朝にして神、儒、佛の三道を棄つるの不可能なるは言ふまでもなかるべし。

五一、フネロサの日本畫論

日本畫の特質に就きて、もと、我工部大學の講師たりしダイル氏は云つて曰く、日本美術を鑑賞せんとするものは、先づ、日本に住居して其大氣を呼吸せざるべからず。日本畫は西洋の意義にて云ふ繪畫にあらずして、寧ろ場面に現はれたる感情を描く所の詩なり。而して其場面は決して複雑なるものにあらず。日本畫工は、自己の感得せし特別なる感情に適合しがたきものは、すべて之を省略して、單に觀者の注意に値ひするものゝみを描寫し、其鑑賞家も亦煩瑣なるものよりも寧ろ輕妙にして單純なる作品を賞揚するなり。

或記者は此問題に就きて云へり。日本畫は人間の精神を以て自然の精神の一瞥を捕へたる表現なり。實際は轉變すべきも、かくして空想となりて永續する氣質

の表現なりと。日本人は充分に此簡潔を現はせり。此原理はこれ實に日本繪畫術の根本的法則なり。

其日本畫を評するに、人間の精神を以て自然の精神の一瞥を捕へたる表現なりと觀じたるは、誤りなき見なるべし。自然の精神の一瞥を捕ふとは、畫家が自然に對して感得せし刹那の印象を暗示するを云ふ。徒に形象に拘々たらずして、直に能く自然の眞髓を把握するを云へるなり。要するに日本畫の特色は、其國民性の然らしむる所、其簡潔にして雅味を有するの點にあるべし。

多年日本にありて我國の美術に造詣深きフネロサ氏は明治十五年五月十四日、時の文部卿をはじめ、朝野の名士に、日本畫に關する自己の觀察を演説したり。氏は數條に分ちて日本畫の特色を列舉し、口を極めて之を頌美せり。

第一、油繪は日本畫に比すれば、實物に擬似すること、猶寫眞の如し。然れども、是、余が説に於て曾て善美の基本となす所にあらず。天然の實物を模寫するを以て、美術の本旨と爲すの說、畫家又は公衆の心頭に迫りしは、眞に美術の退歩に趨くの兆なり。人徒に巧みに天然に擬似するをのみ好みて、更に天然に優るの妙理を顧

みずんば決して事の宜きを得たるものと云ふべからず。最近歐洲の畫家は、大概妙想の何者たるを問はず、其術、遂に理學の一派たるに過ぎざるに至れり。日本に於ても、亦天然に擬するの説は、頗る繪畫を害したるが如し。諸君、かの應舉の風一度起りて、専ら寫生を尙びしより、日本畫のいたく面目を損せるを思はずや。外人は噴々として北齋を賞すれども、余は獨り之を誹れり。蓋し他の之を賞する所以と、余が之を誹る所以とは適、一事由に歸す。即ち寫生を主眼として全く妙想を擲却せしこと是なり。

第二、油繪には陰翳ありて、日本畫には之なき。是を以て外人往々日本畫を見て、以て不正と爲し、竊に嗤笑する者あり。然れども陰翳なきは決して誹議すべきにあらず。或は却て之あるに勝れるものなきにあらず。余が所謂妙想を顯出せんには、濃淡兩部の湊合と佳麗とを得んとを要すれども、こは必ずしも陰翳あるを要せず。畢竟陰翳は濃淡を表するの一法に過ぎず。而して此法の外更に法なきにあらず。且つ、こは未だ以て、甚だ良法なりとすべからず。何となれば眞に學理によりて陰翳の度と、其様とを究めんと欲せば、心力既に之が爲めに箝束せられて、復畫の

妙想を求むるに迫らざるべし。意既に善美を缺げばなり。日本の畫法は然らず。畫中若し暗處を要すれば、則ち若干の墨を施すのみ。曾て心を勞し、時を費して以て陰翳の度を計り、纔に筆を下すを須たすして、其妙想的然、吾人を感動すべし。故に陰翳は必ずしも必要にあらざるなり。

第三、日本畫には鈎勒あるも、油繪には之なき。上に色彩の輪廓なきを以て、西人或は日本畫を以て妄なりとす。是、畢竟一を知つて二を知らざる言なり。抑も鈎勒を施すは、第一に線の佳麗を増し、第二に湊合を善くし、第三に筆力の美を顯はし、以て妙想を精確にするの便あり。今假りに數多の線、若くは色を以て人像の輪廓を作るとなすに、若し中途にして躊躇すれば、妙想立ろに消滅し、風致索然として去るの虞あるべし。雖、日本の法を以てすれば、容易に妙想をして瞭然たらしむるを得べし。歐米の畫家、近年、頻に鈎勒を施すの法を用ひんとするも、亦宜ならずや。

第四、油繪の顔料は豊富にして濃厚なり。日本畫家の用うる所は、之に反して概ね輕疎にして且つ淡薄なり。是に於て、油繪を是とする者、往々其豊富なるに矜り、其濃厚なるに誇る。然れども、是、誠に喜ぶべきにあらず。其豊富なるを以て特に宜し

と爲すは、抑も何の故ぞや。是會て色の湊合を増さず、又色の佳麗を加ふるとなきにあらずや。蓋し色彩の佳麗は、一色特有の性質に由るにあらず。各色の對比、及び序次、善く調和するに由るものにして、最も淡泊の水色を以てするも、猶之を完成するを得べし。之を譬ふるに、色の豊富なるは、尙音調の高きに似たり。音調の高きものは必ずしも其低きものより美ならず。且つ其豊富なるは却て弊あるを免れず。即ち愈豊富なれば、愈濃厚にして調和し難く、之を處理使用すると極めて力を勞するを以てなり。歐洲畫家の言に曰く、顔料を用ふるの必訣を得るは、畢生の業なりと。果して然らば、一生の力を畫術中の一料に竭して到底、妙想を見るに至るを得ざるべし。某の議者云ふ、油繪の發明ありしは眞に歎すべし。是が爲めに畫術の退歩を致し、遂に雄渾活潑の風趣を失へりと。是れ實に誣言にあらざるなり。

第五、油繪は繁瑣にして日本畫は簡潔なり。二者、果して孰れか是なる。余を以てこれを觀るに、日本畫の簡潔なるは、却て甚だ可なり。蓋し簡潔なれば湊合を得易く、随つて妙想を表し易し。故に妙品名作は、常に簡潔なり。油繪に於ては、或は全面に木石、花卉、牛馬、鶏犬等多種の物件を摹寫して寸白を遺さざるものあり。其光彩陸

離偶、凡眼を眩惑すべきも、具眼の士より之を視る時は、眞に無用の長物たるに過ぎず。是れ人の心目を一點に聚合せずして、全く妙想を傷ふを以てなり。歐洲の畫と雖昔時にありては、較、簡潔なりしは疑ひを容れず。嗚呼、今日東洋の畫を斥けて鹵莽となし、又之を目して兒戲となすものは、蓋し妄中の妄にあらずや。

これ日本畫の得點を臚列して寧ろ頌美の極端に奔れるもの、其一、二、三、五の四條に於て述ぶる所は、大體に於て是とすべきも、第四説は稍、附會の嫌ひなしとせず。色彩の訣を得るは、一生の事業なりと云ひたればとて、必ずしも之によりて妙想に到達し得べからずと斷するは、少しく早計にあらずや。色彩の豊富なるは、調和を害し弊害ありと云ふは、首肯しがたし。日本畫の顔料の不足なるは、決して日本畫保存の理由とはならざるなり。

五一、ブラウネルの日本演劇及び音樂觀

一九〇二年(明治三十五年)發行のクラレンクル・ブラウネル著「日本情志」中に、著者の日本の劇及び音樂に關する觀察を載せたり。彼は五年の間、日本北陸地方

にありて親しく日本の風俗習慣を研究したりと公言せり。誤謬もなきにあらざれども、姑くこゝに掲ぐることはなせり。記者は、口を極めて我俳優の拔群の技倆あるを賞揚せるも、之と反對に又口を極めて我音楽の幼稚なることを冷笑せり。先づ其劇の觀察よりして之を掲げん。

芝居

日本の役者が顔を作るに熟達せる事は實に驚くべし。盛夏の候普ねく用ひらるゝ日本の團扇面の繪は、多くは、役者の肖像にして、しかもこは又眞像なれば、少しも實物と異なる事なし。繪にある如き派手なる衣服は、全く其儘にして、肉體の恰好を包み隠して餘りあり。其歪める肖像は、日本藝界の明星ともいはるゝ者のみにして、少しく芝居に精じき人は、一目して其誰なるかを知る。思ふに日本の役者は、ど扮粧の盛なるものは、世界に其例多からざるべし。

彼等の多藝は又驚く可きものにして、悲劇、喜劇、滑稽劇、一として通せざるはなく、男性となり、女性となり、又獸類ともなり、併も、皆一様の輕快と巧妙とを顯はせり。彼等の此技術に熟達するは、抑も大なる原因の存する事にして、日本にては役者

は世襲の業をなし、彼等の父も、祖父も、曾祖父も、皆此業と共に生れて此業に死したれば、此遺傳と其訓練とを受けたる日本俳優の技藝に勝れたるは、蓋し當然の事と云ふ可きなり。

本名を堀越秀と呼ぶるゝ團十郎の如き、喜劇の名優菊五郎の如き、全然何物も知らぬ吾々外人をさへ、或は笑ひ或は泣かしむる程の入神の技を有せり。

かゝる秀拔なる技能を有せるにも拘らず、彼等のミカド帝國に於て重んぜらるゝに至りたるは、實に近年の事にして、一八八七年の秋、外務大臣井上伯が俳優の地位を高めんとし、園遊會を催せし時、皇帝陛下臨幸ありて、親しく俳優の技藝を御覽あり、優渥なる御褒詞をも賜はりしより、以前は紳士との交通を禁止されし彼等も、茲に始めて人間の仲間入りをなし得るに至りたるなり。

(1057) 観樂音び及劇演本日のルネウラブ

古代の人口取調記録を見るに、役者は一疋二疋三疋と數へられたり。元來、日本にては物を算ふる時、此一二三の數字以外に、算ふる對象物に依て、それ〴〵の形容語を附するの習ひあり。例へば人間ならば、一名二名、又は一人二人と呼び、紙の如き扁平のものは一枚二枚、家は一軒二軒、船は一艘二艘、人と鳥と以外の動物は一

正二正と云ふが如し。即ち知る俳優役者は素と獸類の階級に編入せられたりしものなるを。

されば近年まで俳優は上流社會の人々に近寄る事能はざりしにも拘らず名優は續々として輩出し前記の園遊會以來は高貴の邸に招かれて厚き待遇を享くるに至れり。

劇場は古代日本を實際に研究すべき唯一の場所なり。其中には往古の荒唐無稽なる傳説をも交ゆれども兎に角に人々の記憶より逸失し去りし風習や物語を眼前に活現せしむべく役者の音聲は又驚くべきほど高調なり。かゝる音聲は舞臺以外に於て決して之を聞くこと能はず。もし泰西人にして日本役者の聲色を真似んと欲せば忽ちにして氣管支炎を引き起すべきは必定なり。悲劇扮粧者の如きは其咽喉緊縮して血管は膨れ一々の毛孔よりは今にも血を迸出せんかと思はるゝほどにして其兩眼は各個別々に運動し一方天を睨めば一方は地に俯し一方東を見れば一方は西に向ひ其廻轉して終には眼球全く隠れて只白眼のみとなるに至る。これ多く奸惡なる人物を寫すの時にして觀者をして自ら實地

に臨むの感あらしむるなり。

其皇帝や女皇に扮せし時などは實に奇にして古代の神話劇を見るが如き心地す。殊に其歩行の容態は全く普通の人物とは異なり、一歩々々足を願の高さに擧げて彼方此方を見廻はし、眼は殆ど直徑二吋にも餘らんかと思はるゝばかり見開くなり。

日本の見物人は技の妙を賞讃する時に拍手せずして其役者の名を呼ぶ。日本の芝居は大抵朝八時に始まりて夜七時迄繼續す。中には只夜間のみ開場するもあり。其内部は殆ど將棋盤の如くに區劃され、凡て柔き疊を敷き敷物より一呎程高く欄干を渡し、各區劃に六人づゝ座し得る様になれり。

見物人は自ら茶道具と辨當とを持參す。田舎にては殊に然り。此外又酒樽などを持參するもあれど都合にては場内に茶屋ありて一切の飲食物を廉價に販賣し、劇の幕間には見物人相互に知友を訪ひて酒杯を交換す。又時には役者の見物人の所に伺候する事もあるが、かゝる場合には藝者と同じく若干の纏頭を受く。幕の下り居る間、無數の食物賣子は欄干の上を傳ひて騒々しく叫び歩く。喫煙は少

時の絶間もなく行はれ、看客の衣服には何等の制限なく、自己の好まざる劇の間は、假睡を貪るものなごもあり。
芝居や俳優以外に我等の注意を惹くものは音楽なれども、こは絶對的に下等なるものにして、到底我等をして興趣を催さしむるに足らず。余は一夕、親しく日本の音楽を聴くことを得たり。我友なるオハシサン(大橋さん?)は、ガクニン(樂人)の名高きを述べ、ガク(樂)の高雅なる事を説きしも、我等は、到底聞くに堪へざりき。恐らくは何人も、かゝる、うき目に遭ひし事はあらざるべし。我等は之を聞く間、嘲笑を抑ゆるのあまり、内臓の痙攣を惹起し、其苦しさは、痛きに泣く涙を抑ゆるにも増したりき。

ガクと云ふは日本語にして、之を英語の辭書にて見ればミュージックとあり。若し讀者諸君にして一度ガクを聴かば、辭書が如何に狂ひたるかを疑ひ、又其信憑すべきものなりやを疑ひ、従つて辭書に便るを躊躇するに至るなるべし。
故にガクはこれを下の如くに説明するの要あり。曰くガクとは、不規則なる支離滅裂の呼聲の排列にして、調子外れの絲の音に唸り聲を交へたるものなりと。再

び辭書に之を問ふに、此唸聲は實に歌唱なりと云ふ。詳しく言へば、ウタとはソングを意味し、ウタフとは歌ふことを示す動詞なり。即ち、オウタウタヒナサイと云へば、ブリース・シング・エンシングの義なれども、寧ろ之を、何卒兩耳を塞ぐ綿を賜へと譯するの可なるに如かず。能く耳に栓して然る後、ガクを聴かば、吾人は幸ひに狂氣せざるを得べけれども、然らざれば、多大の克己心を要するなり。

日本には幾多のガクの種類あるも、之を他國のに比すれば、何れも劣等なり。只其中に一の少しく勝れたるものあり。そは秘傳に屬し、神道の祭典に用ひるものにして、亦不調和なる合奏に過ぎざれども、これには、耳を撃く如き歌なければ、幸ひに綿の用意までには及ばざるなり。

余は屢、樂人なるものを觀察して、彼等の多く心臓破裂と腦充血とを以て死するを知れり。歌を謠ふが爲めに、彼等は咽喉を過役して、咽喉部膨脹し喉笛は非常に隆起して、兩眼は血走り、顔面は鈍き灰紫色をなせり。

數人の樂人合奏する時は、彼等は律にも調にも少しの注意を加へず。此くの如きは、所謂ガクには何等の關係なきなり。彼等は只相互に時を同じくするのみ。故に

唱歌者は其全體に不調和を來すが如きに頓着せず、己がじしに唸り又叫ぶなり。日本にては、雅樂を除きて音樂に符號なく、口より耳に傳ふるのみなれば、生きたる人間に教を乞ふの外に傳習の法なし。されば、女子は幼少より、毎日、教師の許に通學す。此等の教師は多く女子の花盛りをすぎたれば、最早、茶屋に用なきものにして、其樂を教ゆるの方法は、唯少女をして能ふ限り、聲を張り上げ、喉を破るまで歌はしむるにあり。

凡て日本の歌は、此喉を破るを必要とすと云ふ。此殘酷は、實に外人の喫驚せざる能はざる所なり。

我前に坐せる濃艶美麗の婦女が、唇邊媚に溢るゝばかりの微笑を浮べ、玉の如き手に撥を把りて、靜に膝の上に三味線を弄するの時、誰か彼女の惡魔の鳴聲の如き、恐る可く忌む可き聲を以て歌ふべきことを思はんや。しかも其歌の戀歌なりと聞くに至つては、殆ど滑稽といはざるを得ず。

孔子といふ聖人は、支那には曾て眞の音樂ありしと云へるを以て、恐くは日本も往古之を輸入せしに相違なからんも、只進歩改良を見ざりしが爲めならん。され

ど近年ヴァイオリン、ピアノの如きも次第に行はれ、日本の音樂學生にして、外國に留學して名を博せしものも少からざるが故に、日本樂界の前途も全く絶望すべきにはあらざるべし。

五三、諸外人の日本民俗觀

アメリカの一紳士ジェラルド・フォルクと云へるが、日本觀察は奇警にして面白き節少からず。左に譯載するは即ちこれなり。

鷺島園の騒動の如き横濱埠頭

曉の星の光漸く微かなると共に、濛朧たる曙光は今正に入港する我汽船の舳に達し、其次第に鮮明なると共に、彼方に見ゆる富士山は、その雪に掩はるゝ頂を顯はし、嬌然として吾人を迎へつゝあるを見るなり。

されど、船一度埠頭に近づけば、吾人は此美景を歎賞するの暇なきなり。船の推進機の未だ全く其運轉を止めざるに、早くも幾十百の舢舨は四邊に群り來り、船頭は囂々として罵り叫び、其騒然たるは實に形容の外にあり。宛然犬に飛込まれた

る鷺島園の如くなりき。此等の舢舨は珍奇にして、野蠻人の用ひる獨木舟とヴェニスの小舟とを折衷せし如く、角形をなせる艦の隅なる小さき躋と稱する桧の上に、只一本の橈を置き、船頭は其傍に立ちたり。其掛聲かけて悠然と漕ぐ熟練は、實に驚くべきものにして、萬船輻輳の中間を右廻左轉して毫も誤らず、少しも狼狽せざるは感歎の外なきなり。

かくて陸上に上るや、吾人は再び喧々囂々の裡に投せられたり。短き上着を着し、小なる脚部を露出して活潑に飛びまはれる動物は、各、大なる乳母車にハンドルを附けたるが如き人力車を曳き來りて、人ごとに五月蠅く乗車を勸むるなり。初めて不意に柄を持ち上げられし時には、乗手たる我は、殆ど顛覆せんとするが如くに感じ、あわてふためきて側蓋に取りつきたり。やがて、しばし走る間に、落下の心配も、乗る時高まりし胸の動悸も消えはてし、他の人力車に乗れる人の様子頗る珍妙に思はれ、又一二哩の間は、行き交ふ人の多くが、自分のみ注目する如くに感じ、我に何等かの失策あるにあらずやと思はれしが、こは己が心の迷ひにすぎざりしと漸く判明せり。余はかくの如くにして、此人力車を乗用すると二三回

に及びしに、其實に世界の最も手軽にして、最も愉快に又最も便利なるものなるを悟れり。日本の車夫は馬よりも多く、驅け、物に怖れず、案内者を要せず、一度之に命令すれば、何處なりとも望みの場所に赴き、停止を欲すれば、何處にても安全迅速に停止す。是馬車に出來得ざる事にして、馬よりも人間の重寶なる所以なり。若し人力車、五輛又は六輛の列をなすの時、行く手に多少の障害あれば、最も先きの者、先づこれを避けてホーツと云ふ如き掛聲をなし、それより後ろへ逐次に之を傳ふるなり。

小兒と老人との極樂園

余の觀察の及ぶ限りにては、日本に居る外國人は中々に叮嚀深切なり。これ假令、自然に出でしものならずとするも、一度、此國に來りたらんには、何人も直に其風に化せらるゝならん。日本人は余が見し人民中、最も深切にして最も温厚なる國民なり。人或は余と全く反對の觀察を下すも、此くの如きは、思ふに、日本人の性格風習を誤解せしものなり。勿論、日本にも罪人は少からざれども、かの文明國の到る所に見らるゝ如き泥酔喧嘩蠻行は、此處にては、比較すべからざる程少し、日本

は又小兒と老人とに對し、無上の深切と注意を以て好遇する土地なり。彼等は道徳上又は宗教上に於ては、他の國民より何等の指導教育をも受くるの要なし。かの圓き穴に四角なる栓をつめると云ふが如き、杓子定規の頑固者流は、宜しく先づ日本に行きて大に啓發する所なかるべからず。

何所の街上にも、小兒の群をなして嬉戲するを見ざるはなし。彼等は何れも愛らしく、快活なり。余は幾千百の彼等を見しが、嘗て一度も其怒りし聲を聞きしことなし。彼等は、一般に貧民の子弟なれば、時には其饑餓に瀕することあるべしと雖、その顔色は常に生々として其眼は輝き、頬には紅を潮せり。少しく教育ある者、又は裕福なる家の兒童は、決して此くの如く大道に遊びまはることなければ、之を知るに由なしと雖、日本は他の國に於けるが如く、其兒童の間に、亦、貧富の階級の存するにも拘らず、たしかに羨望に價ひするの箇處あり。日本を小兒の樂園と呼ぶは、最も其當を得たると同時に、亦之を老人の享樂地と言ふも不可なし。

清潔好きか汚穢好きか

日本にて最も厭ふべきものは、あらゆる方面より吾人の鼻孔を襲撃し來る所の

恐ろしき臭氣にあり。市街にては塵芥等の汚物を捨つるため、只一箇の小箱の各家に備へらるゝあれども、それさへ取集めの行届かざるを以て常に滿溢して異臭を放てり。殊に日中、排泄物を滿載せる荷車の通行する時の如きは、殆ど窒息せんばかりなるも、日本人は更に之を奇まざるなり。元來日本國民は如何なる下等社會も、日に一回は、血温一度下の、恐ろしき熱湯に沐浴して、其身體を淨むると云ふに拘らず、此事あるは奇怪千萬に思はるゝなり。されども彼等は個人的には中々に清潔にして、蒸暑き日、密閉せる建物の中に催さるゝ、政治上の集會等にも、絶えて白人の間に於けるが如き汗臭きを見るとなし。然るに耕地には遠慮會釋もなく汚物を注入滲過せしめ、殆ど純粹の飲用水は山上にあらずんば之を求むるに所なからしむ。之を以て觀れば日本人は實際、奇麗好きか汚穢好きか、殆ど之を判するに苦しむなり。

若し後來此くの如き不潔の中に、人民益々繁殖して其住所に苦み、又一面には衛生思想も普及し、繁殖の増大、生活の困窮等が彼等の注意と考慮とを惹くに至るとせば、其次に來る彼等の事業は果して何物なるべき。是れ歐米人として、吾人の日

本人に對して注意せざるべからざる要點なり。日本人は世界中、最も大膽に最も智力に富める國民の一なり。彼等は又精銳なる戰士にして、無上の忠君愛國の心を有せり。偶、彼等の體格の矮少なるを以て之を侮るものあれども、身體の大小は毫も精神伎倆の尺度にあらず。否、吾人は寧ろ、日本人の頭腦の重量は其身體との比較上、却て他國民に優るとも決して劣らざるを信するなり。

晴天には沙漠、雨天には泥海の東京

東京は凡そシカゴ程の廣さにして、其人口は之に優るべし。これ其住居のマッチ箱の如きにも似ず、爰に住める人間の數は、中々に多ければなり。然るに此廣大なる市中は、改良道路とては僅に一哩乃至二哩を有するのみにて、これすら車道には砂利を敷き、兩側の人道には石若くは煉瓦を敷きつめたるに過ぎず。其他の街路に至つては、天候次第によりて泥又は砂を以て覆はるゝなり。晴天の日には、心地よき程の微風にても、市街は一面に黄色を呈じ、鼻孔眼孔を問はず、砂塵の襲ふに任せざるべからず。まして強風の日にありては、殆どサハラ沙漠にて、旋風に遭ふもかくやと思はるゝばかりなり。然るに若し一旦、雨天とならんには、街路は

泥濘靴を没し、道か、川か、殆ど之が判別に苦しまざるを得ず。日本の或新聞紙は、東京市中の商家が此爲めに受くる所の損害を一ヶ年二百萬圓と計算せりといふ。これ強ち誇大の言にあらざるべし。近年、日本政府にても大に覺悟する所ありて、水道を敷設し、道幅を廣くし、家屋を清潔にせんと計畫しつゝあれば、追、改良の實を見るを得べきも、日本に遊びし他國人の第一に切望する所は、一日も早く道路を修覆して、沙漠泥海の苦を免れしめんこと是なり。

石を積上ぐる驚く可き技巧

宮城の周圍には、中古時代の建築にかゝる防禦壁あり。こは二百呎の廣さを有する城濠の内側にある石壁にして、高さ三十呎より五十呎に至り、少しの漆灰を用ひず、たゞ荒く刻める石塊を地壁に沿うて一列に築き上げしのみ。此セメントを用ひず、只積み上げし計りにて、堅固に石壁を保存するの技術は、他に見ざる所なり。外見上よりは、殆ど一度に崩れ落ちんばかりなるも、建築以來、已に三百年以上の星霜を閱せるにも拘らず、如何なる地震の影響をも蒙ることなく、儼として當時の偉を存するは驚くべきことならずや。日本人は無學の農民に至る迄、皆よく

此建築法を熟知し、山腹の開拓地などは、圓形の石や小さき切石の壁を作りて、巧みに之を支持せり。

日本に往きて藝者を見ざるは

エジプトに行きてピラミッドを見ざるが如し。

世界漫遊者の多數の證明によれば、日本へ行き一見を要するものは、かのゲイシャなり。彼等は異口同音にゲイシャの華美と其才を賞讃し、日本に赴きながら藝者の踊りを見ざるは、エジプトに行きてピラミッドを見ざるよりも口惜しきとなりと言へり。されば余等の京都に赴くや、ホテルの番頭に案内を頼みて藝者の踊場に赴きしに、其處に行きて間もなく、二ダース程の藝者の群は、ドヤ／＼と入り來り、後よりは、また給仕の一組が盆の上に酒の瓶を乗せて持ち込めり。杯を交換して酒を酌むは、日本の習慣なり。日本人はかゝる事して空しく一夕を過ごす。此娘連の若干は一種の樂器を持てり。そは下等なる音響を發するものにして、只一筋の絃あるが如く、彼等はこれを小さき象牙の平板もて忙しく撥き、それにつれて蟲聲の如き、鋭く高き鼻音もて歌ふなり。但し其音にも調にも些かの變化な

く實に單調極まりたるが、案内者はこれ日本の音樂なりと云へり。あゝ、これ果して音樂の名に値ひするか。やがて踊は始まり、舞妓はすべて美裝し、顔には、皮膚の見えざるまでに厚く白粉を塗抹したれば、其容姿には生氣なく、宛然セメントの塊の如かりき。

彼等は一度も開口せず、又顔の表現を更ゆるとなし。是、其白粉の塗り方、濃厚にして何事もなし能はざるによるなるべし。其踊りたるや、若干人の舞妓一様に調子を合して或は片手を上下し、或は他手を上げて同時に片足を二吋許り前に突き出し、或は、跪きて立上り、或は身體を左右に轉回する等にありて、余等には實に無味乾燥枯淡なるものなりき。かくすると數回、其間、余等は長時間、床の上にて恰も裁縫人の如き姿勢をなし、苦痛を忍びつゝ端座せざるべからざりき。演舞の終りし時、余等大に喝采したれども、其實、内心の失望は實に尠からざりしなり。さはいへ、日本の踊は、かの巴里の亂舞とは事變りて、聊かも淫猥なることや無作法なることはあらざりき。これ所謂優美とにても云ふものなるべし。

樹木の愛養及び其細工

日本人は決して公園の樹木を毀損することなく、之をしてよく其天然の發達を遂げしむべく努力し、其爲め幹や枝に支柱を立て又は針金にて之を引き張り、其通行の妨げたるべきをも頓着することなし。彼等は頗る樹木養成法に長じ、その盆栽など實に目を驚かすものあり。高さ三呎に満たざる松や、楓にして其齡已に三百歳を踰ゆるが如きものあり。

京都に近き琵琶湖と云へる湖水の岸に一本の大松樹あり。地上數呎の處より枝、四方に岐れて殆ど水平線狀に走り、約一エーカーの地を掩ひたり。如何に日本人が自然物の保護に熱心なるかは、此松の樹の入手を見て之を知るべし。其主なる大枝の下には花崗石の大なる柱を立て、之が重量を支へ、小枝は所謂梢に至るまでも悉く針金もて之を巻付け、下より一々支柱を以て支へ、又波濤を防ぐ爲めに半圓形の石垣をも築けり。

もし此木にして、アメリカの都會近くにありしならば、必ず疾くに切倒されて薪とせられしなるべし。日本人は又かの有名なる菊の花もて種々の動物、或は古代武士、或は戦争の状況などを拵へ上げ、巧みに色彩を配合して見る者をして殆ど

實物に接するの思ひあらしむ。蓋し之に用ひる菊花は、皆殊に其目的を以て培養せられしものなり。日本人は實に世界中、最も樹木を愛養し、又最も巧みに細工する人民なりと云ふべし。

忘るゝ能はざる中禪寺湖

三百年前の日本の一大英雄が、我遺骸を安置すべき恰當の地として選定せしと云はるゝ日光は、彼の眼力に違はず、風景の雄壯華麗、稀に見る所殊に其殿堂の美麗なるに至つては、如何に彼の勢力の偉大なりしか、如何に此地が日本に於て最も神聖なる土地として崇められたるかを想像せしむるに足る。其日光の街を出で、かの有名なる神橋を架する小川に沿ひ、或は薄暗き谷間をたどり、或は峻嶮なる丘を越え、或は白布の如き飛瀑の下をすぎ、又或は焰の如き深紅の紅葉の間を通りて、火山灰の堆積の數百呎に及べる圓錐形の丘を攀ち上れば、街を去る五哩弱にして千五百呎の高所に到るべし。これより、しばしの間、樺や杉の林を過ぎ、中禪寺湖の傍に出づ。湖水は深緑を帯び、四方は凡て高山に圍まれ、中には八千五百呎の秀麗なる熄火山あり。湖水の吐口は殆ど三百呎の懸崖をなす、其所より

一哩以上の間を激流、天馬空を驅けるが如く奔馳す。此邊の景は蓋し美の國に於ける美景中の更に美なるものならん。

此湖畔に一のホテルあり。純粹の日本食は、もとより吾々泰西人の口には適せざれども、殆ど半日の山登りに充分空乏となれる我胃袋は、何物かの供給を請求してやまざれば、余は旅館に入りて晝飯を命せしに、其用意の間に、先づもたらされたるは、熱き日本酒の一瓶なりき。此酒なるものは、ビールとブランデーと混合せしが如きものにて、米にて造られ、其味は薄き酸味を帯びたるセリ酒の如かりき。嗜好ある人には之を以て充分の酔を買ふを得べし。やがて用意成りし報知ありければ、余は如何なるものを供せられしか、如何なる料理なるべきなど考へつゝ、食堂に入りしに、我食卓に供せられたるは、曰く、スープ、曰く新鮮なる湖産の魚のフライ、犢のシチュー、焼肉、パンケーキ、ブツディング、及び最上のフランス産、赤葡萄酒一瓶等にして、これ等はすべて其量も多く、其味も口に適し、之を盛れる器は、皆極めて清潔なる磁器、硝子、銀製たり。席に侍せる給仕は又可憐なるムスメサシなりき。眸を放ちて、食堂の玻璃窓より、戶外を眺むれば、大火山脈は四方に蜿蜒

重疊して、彼方には淡青、靜かなること鏡面の如き湖水あり、其畔りに、三四の小屋を點綴して幽邃閑雅、湖心には微風に搖るぐ小舟あり。詩趣、我をして殆ど自失せしむるの感あり。余は此風景の美に恍惚として、暫しは身も世も忘れたりき。而して此美景と美味とを飽く迄、賞翫したる報酬は、僅に一弗に満たざること四十錢に過ぎずとは驚くべき廉價にあらずや。

年老いぬれば、ありし昔の事ども、胸裡に涌き出で、人をして隔世の感あらしむべしとかや。余も若し其境に至りなば、かの燃ゆるが如き紅葉の色も、淡青、清明なる空色も、深緑の湖水も、削りし如き絶壁も、奇々怪々なる瀑布も、亦この火山も、此森林も、皆、只濛々たる一場の幻影の如くに打ち過ぐるならん。されど、此午食は確に心の底に残りて消失する事なく、又之を聯想してかの秀麗と閑雅とは、明かに余が腦裡に書き出され、中禪寺湖は、永遠に余が記憶を去るの期なかるべし。

日本の見世物

日本にては手品見世物の舞臺は、すべて外部にありて、只一枚の幕を以て道路と境するのみ。演技の妙所に至れば、幕を引上げて、場外の群集や通行人に一瞥せし

め、其好奇心を刺戟して入場を誘促す。中には人數不定の音樂隊ありて、演技者中の閑なるもの、合奏するものなれば、其少數の時には三人位なることあり、又二十人の大勢となることもあり。其樂は主にアメリカ樂譜中の活潑なるもの、又は愛國的なるものなるが、其奏樂は、もとより頗る不完全なり。余は或劇場にて、此種の樂曲を數時間、引切りなしに奏するを聞き、て退屈せし事あり。

生硬の文明や不消化の進歩はやがて消滅すべし

殆ど二十五世紀の間、日本人は常に己れの要する百般の方法手段を工夫して、全く安閑なる孤獨の生涯を送り來りしに、今や突然、世界の最も有力なる國民の列に入れり。彼等は其嘗て考へ及ばざりし現代の發明を著々應用し、其敏捷と、諸方面に於ける現代の智的進歩を獲得するの巧妙とを以て、ヨーロッパの腦より湧き出づるミチルヴァの神話を聯想せしめたり。彼等は、現に其貧困と不消化の文明とに苦み、又一方に於ては列強の壓迫に悩みつゝあれども、其國內には此くの如き嘗て見ざるの急速の進歩あり。現世紀の文明は、殆ど彼等の應用し盡す所となれりと稱せられたり。もし文明なる語の意義が、物質的に限らるゝものならば、この

聲言は至當なるべし、而して文明の他の方面、即ち宗教にては、彼等はもとより吾人の教導を待たざるものなり。

世界何れの處にか、日本人の如く、よく文明を應用するの才智を有するものありや。又何れの國民にか、能く古來の習慣風俗と全く異なる事物思想を巧みに同化して、些かの支障だも示さざる日本の如きものあらんや。

これ日本の美風を讚美し、其國民の前途に偉大なる運命のかゝりつゝあるを嘆賞したるものなれども、之と反對に甚だしく日本の風俗を罵倒せしは、南アメリカのイスパニア人ニコラス・タンコナルメロなり。彼は一八七〇年、即ち明治三年我國に來遊し、歸來左の如き觀光録をものしたり。

身體を入るゝ袋

日本婦人は概して身の丈低しと雖、恰好の悪しきことなし。顔は凹凸劇しく、色は薄黒く、肌理は粗く、目は支那人と同じく小なるも、概して之を言はゞ、中々に美にして、舉止の温雅及び衣服の華麗とよく調和せり。余はフランス婦人を除きて、世界に此くの如き妖艶なる婦人あるを知らず。彼等は粹を極めし佛國婦人と同じ

く、人を惱殺する魔力と愛嬌と諂媚とを有せり。初めて日本婦人を見る時は、其衣服の如何にも我國風と異なるに目を驚かせども、やがて其却て便利にして優美なることを發見し得べし。その衣服は甚だしく幅廣くして、襟を胸の上にて交叉し、又幅廣き布を以て腰を巻きつく。これ即ちキモノなるものにして、宛然身體を纏ふの袋なり。支那人、日本人の歩行の奇なるは、一は此衣服の爲めに足の運びを妨げらるゝと、一は形の奇なるが爲めなるなり。余の見る所にては、日本婦人は下着襦袢を用ひざるが如し。彼等はたゞ我貴婦人の下着に相當せる飾りをほごせる襦袢を着し、冬季は支那人と同じく寒さの度に從ひてキモノの數を多くす。思ふに、最下に着せる下着の甚だ薄きを見るは、寢衣の代用をもなすならん。

日本婦人の幅廣き布を以て腰をまきたるは、これ即ち、オビと稱するものにして、廣さは三十センチメートル程もあり、之を巻き附けつゝ、背中に一の結び目を作り、端をば垂れたり。キモノの極めて上等なるものには、袖の一體に金線の縫ひかざりあり。

履物即ちゲタと云はるゝは、單に藁を綴ち合したる靴底の如きものにて、足を其中に入れ、紐もて之をじむ。其形、ローマ人の皮鞋、又はイスパニア人の一部及び南アメリカの諸地方にて行はるゝキンバス或はアルバルカタスに似たり。

履物を脱ぐは帽子を脱ぐよりも良風俗

人の家を訪問する際には、先づこのゲタを脱ぎて門戸に置き、ダビ(タビの誤)と云ふものに穿き換ふ。之は白又は紺の布にて製造せし履物の一種なり。凡そ何れの國民にても、他國の風俗習慣を惡し様に言ふが常なれども、如何なるものにてても絶對の完全なきと共に、また全然、惡しきものはなく、何れもそれ〴〵に其存在の理由と事情とを有するものなるを思はざるべからず。吾々泰西人も、其就きて學ぶ可き多くの事物あるにも拘らず、東洋人に對しては常に嘲笑を以て之を迎へ、かの禮儀に就き習慣を顧みざるは不可なり。此汚れし履物を脱ぎて、清潔なるに代ふるは、管に賞すべきのみならず、寺院や友人の家に行きては、音をなさざるの利益あり。これかの單に帽子を脱するよりも、一層深き思慮によりて行はるゝものにはあらざるか。又手を合せ、度々低頭して挨拶するは、吾々の握手よりも、寧ろ

丁寧親切ならずや。又東洋人が額を地に着くる迄に下げて祈るは、吾人が只、膝を折りてするよりも、數倍敬虔なるにあらずや。

婦人の頭と男子の相貌

日本婦人の髪の結方は極めて奇にして又複雑なり。彼等は自ら結び得ずして他人の手を藉り、其爲め毎日、一時間位の時間を費す。髪の形は、年齢、境遇、職業に依つて種々あり。一般にコスメチックと髪油とを混合せる如き油にて梳れり。こは椿の實より取りしものにて、髪を柔かく美しくし、又其形を保たしむるの效能ありといふ。髪は頸に垂れて耳を掩ふ。頭の頂上には大なる束を結び、カワシチ(簪の誤り)と稱する金鍍金せるピンを挿せり。此ピンには往々にして珊瑚珠を嵌む。アタマ又はカミサと言はるゝ理髪女ありて、何處にも出入し、極めて廉價に其用を達すと云ふ。

前にも云へる如く、日本女子は、丈低く、大概、虚弱なれば、其血色の生々として肥大なる婦人を見ることが甚だ稀にして、何れも病的相貌をなせり。彼等の結婚したるものは、眉を剃り、齒を黒く染むるが故に、其容色を醜くすること甚だし。

日本にては、他の諸國の如く、容色の美は男子よりも女子の方勝れり。日本男子の相貌は、實に醜陋にして、我、コロンビアのアメリカ印度人に酷似せり。男子の衣服は婦人のものごと大差なく、矢張り職業其他に因つて異なり、女子の如く結髪せざれども、額の上部を馬蹄形に剃りて頭の頂上に結び目を造れり。役人又は學者にあらざれば、必ず鬚を剃り落すも、其鬚は他の同人種と同じく一體に少し。

近年迄、彼等は頭を掩ふものなかりしが、ヨーロッパの風習を模せしより、次第に帽子を用ひるに至れり。但し擔夫、工夫などには昔より一種の帽子ありき。こは藁にて造りし我、蝙蝠傘大のものなり。

天性遊惰の日本人

日本人の體格と衣服とに就きては、最早大要述べ盡したれば、次ぎに其道德に就きて物語らん。されどこは短日月の間に之を知悉するの困難なるのみならず、未だ真正に其國を了解するの機會も多からざるに、大膽に誤謬の觀察を傳ふるは余の好まざる所なれば、其説の到底、満足なるを得ざるべきを諒せらるべし。

日本人は天性、遊惰無頼の徒なり。こは一目の下に判然たり。彼等は支那人と反對

に貯蓄心なく、只一日の生活費をさへ得れば、それにて満悦し居るものなり。彼等は又天性の懷疑者にして、偽善偽侠の風あり。心中平かならざる時にても、唇邊常に微笑を湛へ、一度激怒すれば、皮肉なる嘲笑を以て敵手を迎ふ。彼等は温良恭儉の覆面の下に、汚濁險惡の性情を藏せるものにして、印度人と同じく、奸佞狡猾極まれり。

余は又日本人を以て獨創力ありとは信せず。彼等は模擬的智識と同化的才能とを併せ有し、其青年は孜孜として、勉學に餘念なく、泰西事物の堂に入らんとして努力しつゝあれども、彼等には、或物を縦横無盡に解剖し、之と同時に、總括的觀察に於て其真相を看破するの能力なく、只一局部に齷齪たるのみ。かゝるは決して之を眞の才能と稱すべからず。眞の才能なるものは、これ即ち、全地球の實權を握る吾々白人の特有物なり。

處女の不義は婚姻前の一要件なり

日本婦人は、溫柔にして夫には愛情深く、實によく家庭の主宰者たるに適せり。夫の命する處には、何の抵抗も意見も加ふることなく、唯命これ従ふ。小兒の教育に

至つても、また極めて無頓着にして、彼等には物心附きし時に至るも、なほ羞耻の觀念なし。これ蓋し善良なる教育及び道徳上の訓戒を加へざるが爲めならん。未婚女の不義密通は、少しも彼女の結婚を妨げず。否、營に妨げざるのみならず、むしろ生理的發達の證據として婚姻の一要件をなせり。されど女子、一度結婚すれば、良妻となりて、自己の夫に對する義務を完ふせざるべからざるを知れり。但しこは、あから様に云ふ時は、必ずしも、賞讃すべきほどのものにあらず。何となれば、彼等の節操を守るは、敢て自信と道徳上の觀念とより生ずるにあらずして、只恐怖心よりせらるゝに止まればなり。日本婦人は、其容易に行はるゝ離婚の宣告に怖れを懷き、其爲め、身を慎しむの餘儀なきに至ると雖、一方に於て、彼等の夫は正當なる愛情と尊敬とを其細君に拂ふことなくして、却つて妾の許に入り浸るなり。

接吻の習慣無き珍らしき國

日本婦人は、其母としての愛情は、之を白人に比すれば甚だ薄し。彼等は決して其子を乳母に附する事なく、皆己れの乳を以て哺育するにも拘らず、更に之を愛撫

せざるは注意すべきことなり。又日本にては母の其子に接吻するを見ず。これ余の最も驚きしことの一なり。人種の異同、國土の東西を問はず、世界何れの所にか接吻なきところあらんや。接吻は愛情の至上發現なり。精神電流の注出點なり。唇は愛や戀や情や、此等凡ての熱血の彈丸として放射する銃口なり。接吻を藉らずして、何物か、よりよく愛情の表現をなし得るものぞ。母の子に與ふる接吻は、愛情の甘き密なり。子の苦痛を和ぐる鎮痛劑なり。其泣き聲を止むる良藥なり。涙を拭ふ布片なり。要するに接吻は、内に潜む愛の發現に外ならず。

余は斷言す、此くの如くに愛情を有せざる國は、到底、進歩すべきものにあらず。其人民は、決して大思想を有し得るものにあらざる事を。

オカミサンとメカケ

日本人は、一夫多妻の主義を擯斥しながら、事實に於て之を行ひ、支那人と同じく、男子一人にて數人の女子を有せり。従つて婦人の境遇なるものは、實に悲惨の極みにして、貧者の子女の如きは、妾たるか、妓たるかの外に途なきなり。

日本人は支那人と同じく一人の適法の細君、即ち、オカミサンなる者を有し、此婦

人は相應の尊敬を以て遇せられ、家庭に於ては命令權をも有すと雖、夫の彼女を離縁するは極めて容易にして、細君たる彼女の運命は、實に危険なり。其上血統を續け、儲子を擧ぐるの目的を以て雇入れられたる若干の若き婦人あり。皆雜然、一家内に住して各、主人の愛寵を享く。此忌む可きものをメカケと云ひ、其給金は、一ヶ月五圓乃至二十圓なり。彼等は家族の一員にして、其生める子は、正妻の子と同様の權を有し、メカケの數は階級の如何に依つて大概定限あり。此多數婦人が同居すれば、其間の嫉妬軋礫は想像以外に甚だしく、中には、己れの生子を世嗣たらしめんが爲めに、他人の子を殺すが如き者もあり。文明の道德心無き國民の狀態は實に言ふに忍びざるなり。

トルコ人、支那人と同一なる下級の國民

日本に於ける悲惨の事實は、凡ての下級國の夫と同じく婦人の墮落沈淪にあり。自己の小兒を教育する事能はざるもの、即ち、日雇人の殆ど全體は、兒童の教育を引受くる一種の商賣人に其養育を依頼せり。左れば其商賣人は、若干の年齢に達するまで之を養ひて、男子なれば之を小僧に送り、女子なれば下女或は娼妓とな

すなり。又政府の婦女に對する法規は、男子に對するよりも苛酷にして、もし人の妻にして不貞の事あれば、何等の同情もなき宣告を下され、彼女の生命は危険なるものなり。これ等の忌むべき事實の中にて亦一の正當なる事あり。これ他國民の倣ふも可なるものなるべし。そは即ち、夫が妻の誘惑者を殺害し得る事是なり。余は以上、此國に於ける婦人の境遇の概要を述べたるが、かくの如き風習ある國には、到底、平和なる家庭、幸福なる家族の存し得べき筈なく、又かくの如き、下級國民は、社會改善の基たる可き個人道徳を保つこと不可能なり。一國民の其婦女子に對する思想待遇の如何は、其國文明の程度如何を計る驗温計なり。トルコ人の如く、支那人の如く、將、日本人の如く、此優婉美麗なる他性に向つて、侮蔑の限りを盡す國民は、吾人を以て之を見れば、實に野蠻人なり。彼等は惡徳を行ひ盡し、墮落の底に沈み、禽獸と毫も擇ぶ所なきものなり。

かくる狀況を實見したる余は、驚愕と恐怖とに我心を奪はれたると同時に、我屬する人種、我信する宗教に向つて、感謝の涙禁する能はざるなり。

記者の日本に來遊せしは明治三年にありき。知らず、彼にして今日、再遊せば、又

此種の痛言を以て吾人に報いんとすべきかを、併も尙彼の言の、我國人の反省に値ひするものあるは、吾人の遺憾に堪へざる所なり。

同一の苦言は、フランスのカトリック宣教師リギョール氏によりて發せられたり。氏は日本の國弊觀として、其目に觸れたる我社會の惡風俗に就き、無遠慮なる忠告を試みたり。

五四、リギョール博士の日本國弊觀

第一、風俗の混亂

風俗は社會の外觀なり。今其外面上より觀察するに、現今に於ける日本社會の風俗は非常に混亂せると明かなる事實にして、昔の教育を受け、昔の趣味と習慣とを保存せるものは、今の新社會には時代後れとして容れられず、又進歩主義を採りて萬事、皆改良せんとするものは、之に反して今の老人仲間とは相合はず、互に排擠しつゝあるものゝ如し。老人仲間、此國第一の名譽とも云ふべき嚴格なる習慣が遠からず消滅し去るべきを慨き、言語動作の末に至るまで、禮儀の一糸

れず嚴正なりしものが、悉く破られたるを悲むも、今の青年は禮儀作法なるものは、畢竟するに堅苦しき虚禮にすぎず、今日は、これ自由自在に各人の能力を伸張せざるべからざる時代なれば、かゝる窮屈なる形式に拘泥するの必要なこと云ふなり。何れも一理なきにあらず。されど眞理は、此古今新舊の二つのものを調和せしむるにあり。而してこゝに其方法なきにあらず。

風俗と云へば漠然たるが如く思はるゝも、之を精しく云へば、社交道德の外形なり。社交道德とは即ち尊敬、友誼、親愛、自重、貞潔、謹慎、攝生等の諸徳を云ふ。風俗は即ち此等諸徳の言語動作となりて社會の表面に現はれたるものなり。されば社交的諸徳は風俗の精神にして生命なり。禮儀其他一般の風俗と稱するものは其肉體なり、二者合して言動の美と社交の美とが並び生ずるなり。

博士はかくて社交的諸徳、即ち風俗の精神となるべきものには、古今東西を通じて異なる所なければども、風俗そのもの、即ち、これ等の諸徳の社會に現はるゝ所以の形式に至りては、時勢によりて變遷を免れざるを説き、社會の進運に伴ひて風俗の外形の變化せしを以て、直に人情の輕薄に流れたるを慨するは誤

りとして、なほ曰く、

されど日本の風俗は諸種の方面に於て改りたれども、これを以て其禮讓、尊敬と云へる社交道德そのものが變化したりとは斷言し得べからず。今日の場合、日本風俗の亂れ行くを防がんには、世の父母教師たるものゝ注意せざるべからざる一事あり。そは、其兒童に注入するに自他尊敬の念を以てすることは、誠には簡單なれども、社會改良、風俗改良の順序細目は悉く此中に包含せらるゝなり。現代國民の胸中に自他尊敬の念を注入せんとせば、如何にせば可なるやと云ふに、人は如何にせば尊敬せられべきかを教ゆるの外なし。これ、即ち人をして其人格の價值を高めしむる所以の道と與ふるなり。然るに悲いかな、日本の今日は此點に於て最も缺損せり。現今の學問は、青年に萬般の智識を授くるも、人物とは如何なるものなるか、如何にせば、人たるべきかを教示せず。故に何人も自己を知らず。人の心得べき道を知らず。其結果、人物的に道を行ひ、人物的に世を送らずして、只管惡風汚俗に感染するは自然の勢ひと云ふべし。

二、日本人の習慣

人各、習癖あり。習癖は一種の勢力なれば、若し正しく清く高きものならんには、其生涯も亦正しく清く高きものたるべきこと疑ひなし。されば有終の美を濟さんと欲する者は、必ず其初めを慎む。中途にして其習癖を改めんと欲せば、多大の困難を感ずべし。國民にも亦各、其特有の習癖あり。所謂國民性なるものなり。國民は其習慣に支配せられて無意識に之に盲従す。例へば日本婦人の齒を染むるが如き、何人も其理由を知るをなくして、唯かく行はれ來りしを以て、かくするに云ふまでなるべし。これ即ち仕來りと云ふ一種の勢力にして、其勢力たるや法律よりも永久的にして且つ普遍的なり。されば此習慣にして、正しく條規に適ひ、美はしき風俗に合するものならんには、これによりて其國民の性情も亦正規にかなひ、醇美とならんこと、個人の生活の場合と異なることなかるべき筈なり。

日本に於ては社會の狀態と人々相互の交際法とが變遷し來りたれば、新しき習慣の輸入せられしは、勢ひの免れざる所なれども、彼等は未だ舊慣を棄て、新習慣を採れるにもあらず。例へば其外出に當りては洋裝するも、戸内に在つては和裝するが如し。されど、こは敢て咎むべき事にあらず。要は、他日新風習の生ずるに

當りて、確固一律の道德法を生じ、之が精神たるべきを希ふのみ。

日本人特有の習慣は所謂義理人情なり。外人の此國に來りて先づ第一に感ずるは、此義理の習慣にあり。日本人は總じて上下を通じて此義理の奴隸なるが如し。思ふに義理とは義務の遂行なり。既に社會あり、家庭あれば、其社會家庭に對して義理なかるべからず。舊社會にては總べての人は、殿様と家來、旦那と小僧との如く、互に關連してオカゲの下に生活したれば、恩を受けたるものゝ之に報いるの義理を有せしは、自然の結果と云ふべし。然れども今や人々多く獨立して、自營自活の道を講ずるの時代なれば、人に對するの義務も亦異なるに至れり。勿論社會は、恩恵と報謝との交換なくむば、成立し得べからざるものなれども、或權利を有する者が、義理の名の下に、自己の權利以上にわたりて要求するが如きは、甚だしき弊害なり。これ自己の恩恵と保護とを賣りて報酬を得んと計るものにして、即ち頗る高價に義理を賣らんとするものなり。義理を買ふものにして、若し此要求の凡てを爲さざるべからずとせば、これ眞の義理にあらずして惡義理なり。弟、甥が一家の事件に關して其兄又は叔父に之が意見を問ふは、然るべき事なりと雖、兄

又は叔父が其自己の利害若くは意見にかなはざる時に當り、故なく弟甥の志望を阻まんとするは越權にて、且つ專横の沙汰なりと云ふべし。兄、叔父は弟甥の保護に託して之が財産を自由に處分するの權なし。又、かゝる壓制に默從するを以て義理と思ふも亦甚だしき誤謬なり。此くの如きを以て義理なりとせば、日本人の義理は洵に憫むべきものにあらずや。

結婚に就きても一種の習慣あり。此國に於ては年若き婦人及び未だ經驗なき青年は互に交際せず。殊に結婚前に於ては嚴に相警戒し、父兄は己れの勝手より打算して、見す識らずの男女を突如として夫婦なりと宣告す。抑も結婚とは、かくの如く前途遼遠なる子女をして、他人の利害の犠牲に供するの謂にあらずして、彼等をして自由なる新天地を開拓せしめ、一對の男女として琴瑟相和し、以て樂しき生活を送らしむるにあり。然らば即ち、其第一要件として相互に相知り、親任と尊敬とを新天地創造の神の御前に捧げしめざるべからず。

又、子女が長じて其兩親と共に働き、以て生計の道を助くるは至當なり。且つ其親の老いたる時には、己れが幼時に於ける恩恵に報いると、是亦子女第一の義務なり。

り。されど、父母の權利にも亦一の限界あり。思ふに日本に於ける親の權利はあまりに無理にして、其子弟に要求するとは、彼等の當然の範圍を超えたり。又、父母の死に臨みて落膽せず、傷心せず、強ひて平氣を裝ひ、來弔者に對して何等の變事も不幸もなき様に取り繕ふは、これ或は日本人の一種の勇氣なるべきも、されど勿々に死人を包みて棺に藏め、之を家の片隅におきて己れは談笑飲酒するの勇氣に至りては、實に沙汰の限りなり。况んや、大切なる遺骸を墓場に送るに際し、下等なる竹人足の多きを誇り、わざと人通り多き道を迂回して練り行くの習慣に至つては、言語同斷なりと云ふべし。來世の有無に就きては、人々様々の考はあるべきも、兎に角、死は人生の眞面目なる出來事なれば、慎重に慎重を加へてこそ然るべく、死骸の如何なる器物に收めらるゝとも、未だ知らざる他界に旅立つ死者に向つては、常に沈黙と尊敬とを守るが至當にあらずや。日本の官公吏員にして、交際を温むと稱して時に旗亭に會飲するの習慣あれども、是亦徒に浪費して、多くは亂に終り、此等交際場裡に立てる人々をして、家庭の嚴父たり、良夫たるの資格を傷はしむるを見るは、慨はしき至りと云ふべし。これ獨り家庭を傷くるに止ま

らずして、延いて悪影響を社會全般に及ぼすものなり。以上を要するに、習慣の恐るべきは、人一度之に支配せらるゝ時は、假令其非を自覺するも、容易に之を打ち破ること能はざるの點にあり。これ眞に國を憂ふるものゝ心すべき所たり。彼等は如何なる習慣の前に出づるも、其習慣にして苟くも不正不當ならば、斷々として之を斥けざるべからず。良心にして一度之を禁じ、之を命ずる時は、如何に習慣之に反抗することあるも、必ず良心に歩を譲りて之に服従せざるべからざるなり。

三、悲むべき現時の教育法

昔、プラトンはアテネの民衆に語るらく、吾人は青年の教育に最も適應する學術と、青年子弟を人物となすべき必須の藝能とを發見せんがために、絶えず苦心しつゝありと。吾人は此語を、又、日本國民に贈らんと欲す。抑も國を隆盛ならしむるに、最も必要なるものは、國民自ら教育するの一事にあり。日本が開國以來、銳意、海外の學藝を學びつゝあるは、これ、其東洋に於て獨り爾餘の列國を抜くに至りたる所以に外ならず。されど、これ半面の現象なり。余をして忌憚なく、余の此國の教

育に於て、遺憾とする所のものを語らしめよ。

何故に日本は、其國民教育に於て、自國祖先傳來の教育法の善美なるものに注意せざるや。勿論、今日の時勢に於て、徒に固有の教育法をのみ墨守し、他の長を採るの寛懷を缺くの不可なるは、吾人の認むる所なるも、爰に云ふ所は、教育の實行的効果にあり。余思ふ、昔の日本の教育は、悉く實行的なりき。故に智識に於ては、甚だ貧なりしにも拘らず、商人は商賣往來に就いて、知れる所を實行し、其他の庶人は庭訓往來を實行し、女子は女大學を實行せり。要するに、教ゆると云ふ事は、手段にして、寧ろ育てると云ふ事を以て目的とせり。學ぶと云ふは、人物を修養する事にして、今日の如き單純なる理論上のものには、あらざりしなり。かくの如く實行に重きをおきたれば、昔の教育は、智識の點に於ては、自然に缺乏し、武士は勘定を知らず、庶人は無筆を以て能事とし、只各自の職掌に必用なる事を知るだけにて満足したりしなり。然るに、今や自由の勢力伸張し、何人も資力あれば、如何なるものにて、自由を學ぶ事を得べく、布衣よりして宰相たり得るの時世となりしを以て、學問の慾望高まりて、殆ど底止する所なく、其結果、測るべからざるの不幸なる

現象を見るに至れり。之が爲めに破産する父兄幾何ぞ。代議士たらんと欲して得ず、大臣たらんと欲して得ず。空想したる地位は之を得るに由なく、學業を卒へたるものは餘りに學者に過ぎて農工商の業を輕蔑し、官位をのみこれ翹望して、社會に信用を博すべき、眞面目なる位置を守るの操守あるものなし。彼等は空想野心を抱ける無用の徒輩のみ。一定の職業あるにあらず、一定の位置あるにあらず、只空想の中に生活して以て社會に有爲なる人物なりと自任し、或は大學者となり、或は辯護士となり、或は改革者となり、進歩主義、社會主義、共和主義を説きて、危険千萬なる議論を社會に流布しつゝあり。

かくの如くに學問は甚だ盛なりと雖、學問其物は案外に尊ばれず、人らしき人を作るに於て、昔日程の効果を擧げ得ざる所以のものは、學問を學問のために學ばざるが故なり。今の人は古人の如くに人物たらんが爲めに學ばず、眞の學士たらんが爲めに學ばず、只金錢と位地と空想と虚偽とを得んが爲めに學ぶ。青年が學校に於て學び得たる學問は、未だ以て之を玉成して人物となし、學者となすに足らざるなり。抑も學校教育の目的は、唯其能力を養成して肩書を得るの資格を作

るのみ。學校にては學問の鍵を得て社會に生活する第一階梯を得るに止まり、現實の生活は學校を出で、後に始まるなり。然るに何事ぞ、彼等青年の此鍵を捨て、其準備を捨て、社會に生活せんとする事や。

今日の青年には、記憶、想像等の作用は寧ろ過大に發達せるも、判断、意志、良心等は決して發達せりと云ふべからず。故に其頭腦の中には店舖の如くに種々雜多の品物を重積せるも、其思想に順序なく、其行動に規矩なく、其心情に高尚優美なる點なし。これ彼等の學びたるは、智識を求めんが爲めならず、其種々なる智識は皆これ賣らんが爲めに之を飾り列ぬるに過ぎざるものなればなり。

日本に於て、かゝる教育上の大缺陷を補はんご欲せば、意志の修練、即ち意育をして、智育と併行せしめざるべからず。否、寧ろ智育以上に出でしめざるべからず。意志は本來實行的能力にして、理論を以て養成せらるべきにあらざるなり。唯實際の練習によりて規畫せられ、左右せられ、操縦せられ、又堅固にせらるゝものなり。然るに此意志の練習こそ、今日の日本の教育界に最も缺乏せるものたるなり。犯罪は智識の足らざるものゝみならず、意志の弱きが爲めに行はるゝこと、亦頗る

多し。德行は到底、青年の時にあらざれば之を學ぶこと能はず。年少の時に於て都會の腐敗せる風俗を見、巷の風塵と謬論とを吸收し、想像も智識も感情も俗化し了りたるものは、其當初こそは外に現はれざれども、其齡二十を過ぎて人間の利慾を生じ、高慢驕奢淫佚の念起るに至りては、さきに心中に鬱積せる汚濁は猛然として湧出し、道義の念は全く破壊せられ、智識の進歩止み、感情も亦狂ふなり。これ精神の腐敗なり。

今日の青年の智識と良心とを指導し、其判断をして正確ならしめんが爲めには、何等かの一定したる原理を與へ、以て青年をして其標準とする所を知らしむるを以て可なりと雖、如何にせん、今日の教育に於ては確乎不拔の主義なきなり。哲學は其性質上、國民の言動を規矩する一團の光明なれども、それさへ確たる基礎を缺ぐを以て、國家にとりて殆ど益する所あるなし。今日の哲學者は、何事を論ずるも何事をも解決せず。故に現時の青年にして哲學を學び終りて後、却て初めよりも解らずなれりと歎ずるもの多し。昔は又宗教趣味の信仰ありて教育の基礎

をなし、人々信仰の定規によりて事を行ひしを以て、其言動は少しも規を越ゆるものはあらざりき。これ宗教の力なり。然るにルソーは、其エミールに於て、人は無宗教的に教育せざるべからず、二十歳を超ゆるまでは、神の名を云ふべからず、靈魂の不滅を説くべからずと云へり。かゝる殺風景なる提供を實行せんが爲めに教育より宗教を省くことは殆ど今日の定則となれり。されど吾人を以て之を觀れば、教育より宗教を別離せしむるは、行く手を定めずして荷を發送すると同じく、人たるもの終に其向ふ所を知らざるに至るなり。宗教を省みざる教育家は、人の一生に於て人が何を爲すべきか、又何處に歸着すべきかを知らず、又之を知る事によりて、人生萬事、自ら明かなる所以を解せざる者なり。ルソーは、己れの子をば棄て、省みず、他人の子を教育せんために、エミールと云へる空想の書を著はせり。之を經典視する教育家こそ奇怪千萬ならずや。

此教育の惡結果に就きては、教育家のみ之を罪すべきにあらずして、今日の教育主義なるもの、罪や更に大なりと云ふべし。或有名なる教育家の言によれば、教育は自己を小にし、自己を束縛し、自己を補足し、時に或は自己を捨てざるべから

す。故に尋常一様の赤心にては不十分なり、萬事を引受くるの深切なかるべからず。父母が子を思ふの誠よりも猶温き誠を有せざるべからず。然るに、現日本の思想界に於て、輿論と稱し公論と唱へ、或は主義と云ひ、理想と云ふものゝ中に於て、教育家をして家庭の父兄よりも深切に、其子弟を教養せしむる動機となるものありや否や。今日、教育家を左右しつゝある動機は一あり。曰く、黄金、是なり。今や黄金萬能の世の中となりて、教育家それ自らも、亦金力を以て動かさるゝに至りたれども、黄金の力如何に偉なればとて、以て熱誠を買ふこと能はざるなり。人をして献身的の事業に従事せしむるには、利益よりも高尚なる目的物なかるべからず。余は之を名けて宗教上の理想、又は信仰と云はん。今の世の教育家が世人の侮蔑する所となるは、其高尚なる目的を缺ぐによればなり。而して教育家にして其天職を盡さざるによりて、之が爲めに至大の悪影響を被るものは、これ實に國家たらずむばあらず。

これによりて、余は教育家を最高の位地におくを怪まざるものなり。地上に於ては、人間の精神の上に、絶えず感化を及ぼす所の教育の業より高尚なる天職はな

し。されば國家の偉大なる人物と云ふは、決して政治家にあらず、將、軍人にあらずして、遠大なる天職と寛厚の心情とを以て、他日、奉公の政治家となり、忠勇の軍人となるべきものに、光明と生命とを與へ、以て天下後世の人々に眞理と道德との遺産を残す者にあり。昔の教育家は、斯くの如き見識を以て子弟を教へたりしを以て、其思想及び事業は長く門弟の腦裡に印刻せられ、弟子は師の面影により、思想によりて其生涯を終りし者少からず。之を要するに、昔の教育は權利と尊敬との事業なりしも、今は即ち然らず。教育者は權利なく、又尊敬の念を有せざるなり。これ今の教育家は無名の教育を施しつゝあるを以てなり。學者徒に學術の神聖を呼稱するも、其尊ぶ所の學術は抑も何を教ゆるか。人間は物塊に過ぎず、其作用と快樂との爲めに凝結せしものなりと云ふにあらずや。かゝる學問によりて歸納されたる人生の目的は、物質的快樂以外に出づる事能はざるは明々白々と云ふべし。さればこそ教育者自身も亦唯金儲けの爲めに、教育を人に施しつゝあるなり。かゝる教育によりて、青年子弟に權利と尊敬の思想とを喚起せしめんとするも、亦難いかな。

四、宗教

日本に於ては、到る處に寺社又は之に關する建物の存せざるなく、又祭祀、佛事等の宗教的儀式、慣例が殆ど國民の生活状態の多くの部分を占むるを見るを以て、昔は此國民の少くとも宗教的國民なりし事を知るも、現在及び將來の事はこれ一疑問なり。

或一部の日本國民は無宗教を以て自ら誇りとし、能ふだけ宗教的の表章を避けんことを力めつゝあるも、彼等とても全く宗教心を失ひしものとは認むべからず。由來、今日の科學者は科學萬能を信するものなるに、とかく教師の言には從順に過ぐる日本人は、此種の言説に傾聴し、多少、進歩せる頭腦を有する者は、宗教を信する者と思はれ、迷信家を以て目せらるゝに至らんとを厭ふの風あり。されど科學は到底、人生の歸趣を明かにするを得ず。真理の幽玄を闡明せんとするものは、益、宇宙の大にして自己の小なるを知り、且つは一方に於て偉大なる科學者にして、同時に敬虔なる宗教家たりしもの少からざるの事例を目撃し、他の一方に於ては、更に眞面目なる宗教の人心を支配するに於て、社會上に驚くべき勢力あ

るの事實を認むるに至り、漸くに宗教の必要を感得すべし。又之と同時に、然らば吾人は如何なる宗教を採るべきか。第二問題に接觸し來るべし。余は先づ儒神佛の三道よりして之を稽査せんと欲す。

儒道 儒道は元來、宗教にあらず。其始祖たる孔夫子も宗教の本旨に就きては少しも論せず、唯人々に向つて仁の道を説きしのみなりしも、現日本の社會を知り、其歴史に現はれたる風俗、習慣等の本源を詳かにせんが爲めには、孔子の書は極めて必要なるものなり。多くの真理を簡明に説明することに於て、又知識を研ぎ、判断を正しくし、名分を明かにするに於て便利なるは、此哲學に如くはなかるべし。されど、日本の現在に於ては、其公德、私徳の上に影響を與ふる事に於て、儒道はイギリス、ドイツの哲學と同じく、最早、其効力なきものにして、其道既に廢れ、孔子は死滅せるものなり。

神道 神道に關する言論は、日本人の神經に觸るゝと大なれば、之に就きて語ると難し。雖、こは兎も角も宗教として興味ある美なる教道なり。即ち神靈が國民の子孫と共に、冥々の裡に交り結びて之を守護すと稱し、到る處、家庭にも、山川

にも、洞窟にも、池沼にも、祠を建てて之を祀らざるなきは美はしき風と云ふべし。かゝる單純なる信仰を以て、愛國敬神の情を養ひ來りし日本國民は、他國人と交通し、其歴史を研究するに及びて、何れの國にても創業者は皆神にして日本のみ然るにあらざるを發明し得たり。これ神道に對する一の打撃なるべし。思ふに神道の經典も、久しきを経ずして文學美術と同一の位置に止まるに至るならんか。余は二つの理由によりて、神道に説く所の道徳が、幾何の影響を現社會に及ぼし得べきかを疑ふものなり。第一に神道の教義は明確に定義されず。第二に、神に捧ぐる祈願は、地上の利福のみに係はりて靈性と歸趣とに就きては更に説き及ぶ所あるなし。神道の道徳は餘りに單純なり。思ふに太古法律、刑罰の必要なく、民に惡心なく、其生活の正にして美なりし時に於てこそ、カンナガラの道も其効ありしならんも、銅臭紛々たる現時の世に於ては到底、何等の効力なかるべきなり。

佛教 日本文明の大部分は佛教の賜物なり。智識の方面より云へば、日本に支那の學術技藝を輸入したるものは、佛教の宣教師なり。道徳の方面より云へば、佛教は第一に慈悲を標榜し、戒律を道徳的生活の要件となしたるを以て、日本人の性

質には最も適中せしものなりしなり。日本人の放逸過激の性行に、忍耐と深切との加へられたるは、佛教の日本國民に信せられたる結果なり。されど同時に佛教は其汎神的教義を以て萬物を混同視し、以て國民の精神に夢幻的の空想を與へたり。未來に於て虛無寂滅に歸すと云ふは、人の情慾を全く消滅せしむると共に、之をして失望に陥らしむ。佛教が寂滅に歸すと稱して、尙且つ來世に福祉を得んが爲めに功德を積むべしと云ふは、吾人門外漢の知る能はざる所なり。又奇異なるは、佛教の尊信する佛體は、抑も何者なれば之を信するか、由來の不明なるとなり。近時、佛教界には又舊佛教の迷信を除きて、泰西哲學の一部を加へんとするものあり。汎神哲學と佛教とを合するは、敢て難きとはあらざるべきも、其結果恐らくは人民の信仰を失ひ、實行の點に於て何等の効なく、只宗教の境を越えて汎神的世界觀及び人生觀を得るに過ぎざるべし。

以上を約言すれば、日本には多くの宗教的習慣あり。又多くの宗教上の美はしき真理あれども、三教共に其過去を研究し、其全體を通觀すれば、何れも今日の日本社會に對して尙、缺點あるを免れざるなり。

記者は其永年、日本にありて我事情に通せるだけ、我國弊の輕んずべからざるものをば、縦横無盡に抉出し、吾人をして殆ど完膚なからしめたり。彼は其身の宣教師たるだけに、ニコライ師と同じく、宗教に至大の希望をおきたるが、其言は又、我國人の熱慮反省せざるべからざる所たるは、敢て多辯を要せざるなり。

五五、ミシエル・ルヴァン博士の日本文明論

パリ―大學文科大學にて、東洋文明史の講座を擔任せるフランス人、ミシエル・ルヴァン氏は、非凡の學才を有する人にして、年少、既に「國際仲裁論」をものして才名を天下に馳せ、後、又ジョセフ・ド・マイストル、ジュール・ジュサン等の傳を著して益、著名となれり。氏は一八八三年(明治二十六年)我文部省の聘に應じて帝國大學法科大學の教師となり、明治三十二年に至る六年半の間、日本に滞在して學生に講義を授くるの傍ら、フランス人及び邦人各一人の助手を雇ひて日本の事物を研究し、其本國に歸りて間もなく、明治三十三年、日本文明史なるものを著述したり。未だ其緒論を出したるに止まるも、採つて之を讀むに、觀察の如何にも深き

を思はしむべし。由つてこゝに、書中「日本文明史に於ける應用」と題する結末の一部を譯載することとせり。

氏は先づ、十九世紀に至りて歴史研究の範圍擴張せられて極東に及びたること、すべて研究は普ねく事の史蹟に涉りて之を比較するを要することを述べ、次で極東の歴史に於て日本研究の趣味ある所以を説きて曰く、

歴史の主旨は、大國又は奇異の國民を叙するにあらずして、進化の域にあるものを究め、以て社會活動の理法を撰るにあり。支那は其燦爛たる文明を以て、歴史の資料に供給すと雖、其文明は三千年以來、毫も變遷することなく、朝鮮は又、其原始的の状態を以て吾人の好奇心を動かすと雖、精密なる資材なく、以て其裏面の發達を明かにするに由なし。然るに獨り日本に至つては、長大の進歩をなす一大國民たるを明かにして、良好なる研究の資材は枚擧に遑あらず。自發的なる其社會の不斷に隆興しつゝあるを詳かにするを得るなり。彼は六世紀の頃、朝鮮及び印度の風化を受けしが、十九世紀に至りてはヨーロッパの影響を被りて更に發展し、外來の事物を消化して、固有のものとなすの特質を以て、東西の文明を調和せん

とせり。吾人は此小乾坤中に於て、我ヨーロッパのみならず、支那、朝鮮等の極東の文明を觀察するを得るなり。

日本の驚くべき文明は學理上、實際上及び哲學上の三見地よりして觀察せらるべし。吾人は今こゝには、單に學理上よりのみ觀察を試みて、他の二見地の推測に利せんと欲す。

東西の文明は、もと相裨補せんがために作られたるが如く、何れにも優れる所あり、又劣れる所あるを以て、虚心之を比較して互に其長を學ぶべきなり。ギリシアの美術と文學、ローマの法律は共に世界に不朽なれども、其歴史は之を宇内の歴史に比すれば、枝葉のみ。支那は智力上、世界に於て少くともローマと同様の地位を占むるを得べく、優美精粹なる日本は又極東のギリシヤとして其聲名を有するを得べし。故に東洋の文明を發揚する時は、これ更に西洋の歴史上に赫灼たる光明を添ふるものあるを疑はず。思想上に、習慣上に、東西相異れるもの驚くべく多かるべしと雖、其研究分析は、互に大に利する所あるべければなり。

今こゝに日本の外的發展の跡を探るに、太古の日本はこれ帝國の創造時代、即ち

神代の治世の長久なる時代にして、之に次ぐ上古の日本は、支那文明の採用を以て發端とせる千三百年乃至千四百年の時代なり。其間には、耶蘇紀元八世紀に於て奈良朝の文明あり、九世紀、十世紀に於て平安朝の文華あり。ついで源平二氏は、藤原氏を倒して武斷政治は文治に代り、かくて漸くに封建の社會成りぬ。十六世紀に至りて、始めてヨーロッパとの關係起り、之と同時に信長、秀吉等の豪傑の崛起するあり。日本第一の政治家たる家康は、日本の門戸を鎖して二百有餘年の長久なる平和を保持し、以て近年、アメリカ使節の渡來するまでに及びたり。近代の日本はこれより俄然として勃興し、一八六七年の革命以來、國運日を追うて隆にして、日本は其間、封建を廢して中央集權を敢行し、頻に泰西文明を輸入し、古日本が曾て支那の文物を模倣したりしが如く、熱心に外國の文華と本土の文明との合致を計りたり。

更に内的生活に立ち入りて觀測せんか。吾人は先づ物質上の活動よりして之を始めんに、舊日本には經濟學者をして驚嘆せしむるもの甚だ多し。生産の方法を見るに、日本人は始終農業を貴び來りたれば、其効果又著しかりき。彼等の用ひる

米招は古エジプト時代のそれに等じきも、農夫はすべて堅忍にして播種、施肥、灌漑等すべて頗る巧みにして、田圃はさながら庭園の如し。工業に於ても手工の傑作多きヨーロッパ人を驚かしむべし。されど其人民の敏活を證するには、商業の觀察に如くはなし。何となれば、日本人は元來商業を輕んずると大なりしのみならず、又其智識を他に仰ぐの途開けざりしにも似ず、ヨーロッパと同一の諸種の機關を創造したればなり。既に十二世紀の中葉、ヨーロッパにはイギリス及びオランダの二三市府に於けるの外、未だ確實なる銀行のあらざるの時に際し、日本の銀行は早くも有名なる組合をなして、租税を領收し、小切手を支拂ひ、手形を發行し、爲替手形を取引し、割引をなし、終に漸次、今日の銀行の如き業務を執行するに至りたり。爲替手形の如きは、十三世紀に於てはヨーロッパに於て纔に世人の知る所となりたるに止まりしも、日本にては已に詳細なる規定あり。小切手の如きも、泰西にて之を實用せしよりも、五十年の古に於て既に用ひ居たりき。日本にては、財産の分配に就きては、表面上、專制制度の行はれし様なるも、其實は然らずして民主制度存し、其一種任俠的の社會主義は、數百萬の勞働者を保護し、各勞働者は常に

殆ど自治獨立、自尊の生産者たりき。之を農民の生活に見るに、彼等は族長制度に類する群團をなして相集まり、村落毎に共同團體を作り、百事概ね、團員全數の承諾を以て處分したれば、何人も強制せらるること少く、相互援助の精神は全村に浸漸し、其爲めに貯蓄預所、保險組合、病院、棄兒養育所、裁判所其他の設備あり。債權者の債務者を虐げ、又凶年に際して小作人に收穫の全部を與ふるを拒むが如き地主も少かりき。されば、極めて富めるものは甚だ多からざりしも、亦赤貧のものも稀なりしなり。此社會經濟法は、鎖國たる日本の二百年間、能く用ひられて其人民をして多福ならしめたり。

次に法律を觀察せんに、日本の民心の如何に秩序と正義とを貴びしかを知るべし。日本の法制史は、萬國の比較法制史中、名譽ある地位を占むるものなり。先づ其公法を研究するに、國民は擧げて最古の族長を戴きて、族長制度の團結をなし、其一致と精勵とは他國に比を見ざる所なり。刑法は寛宥なる法律より漸次、峻嚴なる法律に化し、更に西洋刑法の輸入によりて緩和せり。民法は婚姻舉行の儀式より、養子縁組の最も人爲的なる規則に至るまで、其家族制度を見てローマ法を再

讀するの感を起すべく、舊法の所有權制度を見て、我舊時の封建制度を聯想すべく、又帝國新民法を閲すれば、よしヨーロッパの最新の民法には優らすとも劣らざるの立法事業なるを認むべし。國內法より眼を轉じて、國際法に及ぶも、不對等の條約を改めて、現行の條約を結ぶに至れる歴史の趣味多きあり。思ふに日本國民の如く、奇異なる國運に際會せるは他に類例なく、又其迅速なる進化の奇蹟は世に其比を見ざる所なり。三十三年前の封建貴族政治は、今や實行的帝政となりて、十年來は剩へ立憲政を施行するに至れり。三十三年前までは、其族制はローマに似たりしが、今や殆どフランスに類するまでに個人主義を蔓延せり。三十三年前鎖國の國勢は、今は内外の往來自在なる公開の場所となれり。

國民心理の基礎たる日本の宗教は非常に複雑せり。最初に興りしは神道なり。祖先及び自然界を拜す。幾ばくもなくして佛教傳來し、日本特有の發達を遂げて十八世紀に至りしが、此世紀に至りて舊神道は俄然として再び興起し、殆ど一八六七年の復古事業を醸成したり。明治の現代に至りて神道の教派十二あり、佛教の宗派は百を以て數ふべく、又耶穌教の派は凡そ十種あり。然るに之と相並びて、又

孔子の儒學よりスペンサーの亞流に至るまで、學理上の宗教以外に宗教を認めず、自然道德以外に道德を認めず、又進化哲學以外に哲學を認めざる才學の士あり。

日本の大學は、又日本人種の天才に關し、全く新なる觀察の範圍あることを吾人に示せり。日本文學は思想頗る豊富にして、之を我泰西の新舊作家に對比すれば、更に、奇抜なる所多く、之によりて國民の精神を詳かにするを得。文學の一は和歌なり。これ多くは三十一文字の五句より成るものにして、其一首の中に能く自然界に對する感情、神園を崇仰するの情思を叙ぶ。散文はまた無限の發達をなして歌の短所を補へり。歴史文學、宗教文學等は云ふに及ばず、想像を專一とし、文藝上研究すべき著書の多きこと驚くに堪へたり。例へば小説の種類は其幾百種なるを知らず。而してこは其各時代に於て之を正史に比するに、一層當時の文明を示せり。源氏物語を取りて見よ。千年頃の日本宮廷の生活は、恰もルイ十四世の内裏を見るが如くに明かならむ。演劇も亦大に興味あり、今尙貴族の愛翫する能樂の演技は、宛然ギリシヤの劇場を再興したるの感あり。露天の舞臺は兩者相同じく、

謠曲も同様に、假面を被りたる俳優の態度も亦同じ。尙若し脚本に就きて比較研究をなさば、其研究は吾人をしてギリシヤの演劇を一層詳かにせしむるの資料たらざるを保すべからず。小説及び演劇の外に、外人をして日本國民の心情を一層緻密に洞察するを得しむるものは隨筆及び日記なり。隨筆として趣味あるものは清少納言の双紙に加くはなし。少納言は眞に往時のフランス婦人の面影あり。其資質、淑婉なりしも、亦敢爲の氣象あり。喜んで人を翻弄し、一編の文章を以て其一切の見聞好惡に關する自己の胸臆を吐露し、奇抜の觀察に成れる小傑作をのこせり。此外兼好法師あり、其書は精妙の詞藻、先づ人を喜ばしめ、巧みに一般普通の眞理を叙述したり。日記にも同一の趣味あり、彼の紫の日記や、長明の日記を讀まば、舊社會の狀態は直に吾人の眼中に映出せむ。此等文學上の作物をば、古代より今日に至るまで序を追うて之を研究する時は、日本人の天才は之によりて會得せらるべく、舊日本の心性が、如何に徐々として、併も確實の進化を経て進遷したりしやを明かにするを得べし。

美術は日本の文明中、最も重大なる地位を占む。繪畫は企及すべからざるの特色

を發揮し、又、資素なる結構を以て宏壯なる家屋を作るの建築術あり。此外、彫刻術あり、鑄金術あり、髹漆術あり、製陶術あり、精巧なる木版術あり、音樂には又神道の雅樂あり、佛敎の音樂あり。要するに藝術上に於ける日本人の天才は實に驚嘆すべきものあり。

以上、論述する所を以て之を見れば、日本の文明は、其經濟上の基礎より進みて、すべての諸現象は、皆吾人研究の資料となすに足るものなること明かなり。日本の文明は、其長久なる歴史の何れの時代に於ても、研究者に最も豊富なる材料を供給し、其全體と各部との關係を洞察すれば、同一なる國民的氣象の下に相異なる諸州が連結せられ、其間に日本人種の天才の發揚するを見るなるべし。又其國の政治上、社會上、經濟上の變化は、一層人心の變化を闡明し、或精神の如きは又社會の如何なる變動にも拘らず、永續不變にして、外國より如何なる新規の事物を輸入するも決して撓折することなく、日本思想界に於て依然として存在しつゝあり。

抑も日本國民の、一切の活動を貫通せる日本精神なるものは、果して如何なるも

のなるか。其真正の性質如何。今之を抽象的ならずして、事例を擧げて説明せん。神道の信者は、心の自動的感能に基きて神を崇拜するものなれば、一切の外教を以て悉く異端なりとし、其哲學者は又寧ろ綜合を旨とするが故に、西洋の抽象論を嗤笑す。道徳に於ても、日本にては多くの理論を唱道するものあるを見ず。要するに日本に於ける宗教、哲學、道徳は近世の泰西よりも、却て古賢の宗教、哲學、道徳に近く、其精神上の活動よりして之を觀れば、日本人は謹慎にして甚だしく神の性質に就きて論することなく、又一切の玄妙を明かにせんとを期せず、殆ど知らず識らずの間に於て、其本分を盡すを以て自ら足れりとするものなり。又其温厚の氣象は、千種萬狀なる文學に於て、最も能く國民の思想感情を顯はし、美術に於ても亦同一の精神の之を貫くあり。日本人は實に古代のギリシヤ人の如き稀有の性質あり。若し之をしてギリシヤ人の如く、其學問中、數學を修むるに止まらずして、物理上の研鑽を忽諸に付することなからしめば、決してヨーロッパ人に後れを取るものにあらざりしと雖、不幸にして此人民は自然を愛好しながら、遂に自然界を制馭することを考慮せざりき。されど此點を除いては、日本人の素養は優に

我ヨーロッパ人に頷頭するに足れり。歴史家たるもの、文明世界のすべてを知悉せん。とせば、日本人の精神的素養を無視すべからざるなり。

流石に學識に富み、觀察力の鋭き記者の言として、其言ふ所は、なべての外人よりは、一層に適切なるものあり。我文明の長所、短所は彼が短き論文中に悉されたりと云ふべし。由つて此文明觀を以て本卷の末尾となさんとす。

本卷に列叙したる觀察中、殆ど溢美とも見るべき讚辭を我に加へたる人、枚擧に遑あらず。されど是等は寧ろ我を害ふことありとも益することなし。吾人は上來異りたる人の口より殆ど同音に、我國民に加へられたる苦き忠言を數へて二つを得たり。即ち、一は日本人が嘘つきの人種なりと云ふこと。是なり。アメリカの最初の領事ハルリスの如きは、日本人は地上最大の虚言者なりと云へり。云ふ迄もなく信義は人間生存の最大要件なり。之が不信の疑ひを受くる間は、個人といはず國民といはず、其品性の向上、國運の發展は容易に期待し得べからず。是實に吾人の猛省一番せざるべからざる點なり。今一は日本人の婦人に對する觀念の野卑なること。是なり。思ふに之が爲めに涌起する弊害は、殆ど

9709

1

13609

算ふるに違あらざるべく、其事實は確然吾人の日常に目睹する處にあり、敢て之に就きて贅せず。我國民の品位を高め我國運をして益々發展せよとせんことを期す。此二點は吾人國民の一日も忽がせにすべからざるものなりとす。

歐米人の日本観上編 終

歐米人の日本観上編

非賣品

(第一回配布分)

明治四十一年九月二十日印刷
明治四十一年十月一日發行
明治四十四年八月十五日再版印刷
明治四十四年八月十八日再版發行

編輯兼發行者

大日本文明協會

右代表者

磯部保次

印刷者

神谷岩次郎

印刷所

東京印刷株式會社
東京市日本橋區兜町貳番地

東京市京橋區南鍋町壹丁目貳番地

發行所

大日本文明協會

振替貯金口
七七七 八八八 二一〇

振替貯金口

三七〇〇

大日本文明協會役員

伯爵大隈重信

本會會長
本會評議員

(イロハ順)

東京帝國大學文科大學教授
東京帝國大學農科大學教授
東京帝國大學農科大學教授
東京帝國大學農科大學教授
東京高等師範學校校長
早稻田大學學長
早稻田大學教授
東京帝國大學文科大學教授
早稻田大學教授
東京帝國大學工學科大學教授、實業學務局長
「日本及日本人」主幹
東京帝國大學法科大學教授

文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士
井上哲次郎	石川千哲	和田垣謙	嘉納治五郎	高田早苗	坪內雄三	上野萬年	浮野文二	眞宅勇次郎	三元良郎	浮山重義
井上哲次郎	石川千哲	和田垣謙	嘉納治五郎	高田早苗	坪內雄三	上野萬年	浮野文二	眞宅勇次郎	三元良郎	浮山重義

浮山

山田

重和

義民

磯部

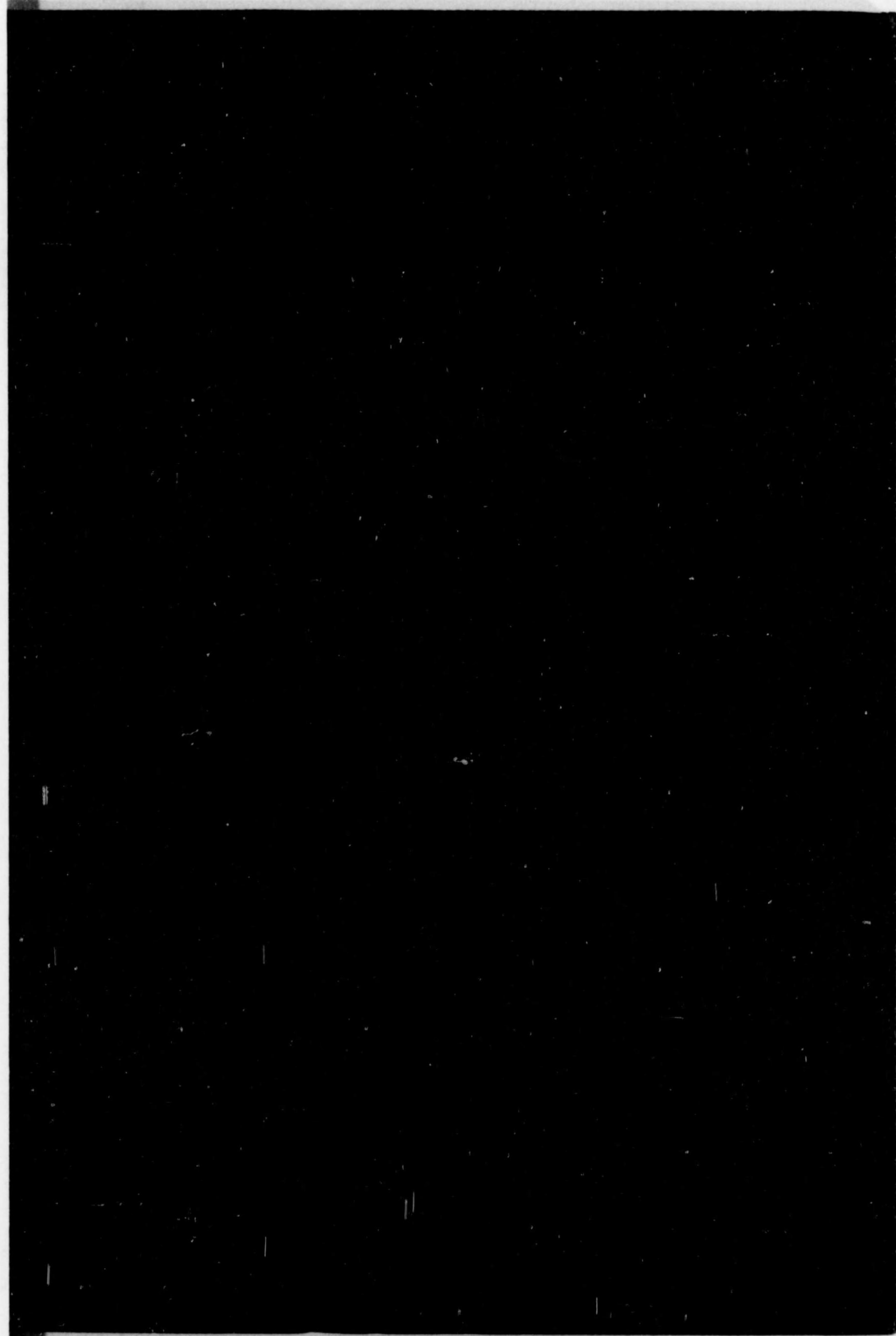
藤部

哲保

藏次

同本會理事





210.6
D170
TV

Ⓜ

002046-001-0

210.6-D170

欧米人の日本観

大日本文明協会／編

上

M41-44

ACB-5231



